宇都宮城跡

（平成18年度第4次調査）

平成20年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮城は、中世から戦国期を通じては約500年にわたり宇都宮氏の居城であり、江戸時代には譜代大名が次々と入封した歴史ある城です。しかし、明治時代以降開発が進められ、土塁や堀が徐々に消滅し、その姿を失ってしまいました。近年の開発により記録保存のための発掘調査が毎年数多く実施されておりますが、中世から近世にかけての貴重な遺跡が複合して存在していることが確認されています。

今回、株式会社穴吹工務店のマンション建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、関係機関との協議のうえ、記録保存のため発掘調査を実施することとなりました。その結果、近世の西館堀跡のほか、中世の掘立柱建物跡や当時の遺物が多数確認されるなど、宇都宮城の性格などを知る上で貴重な資料を得ることができたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面におきまして広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　伊　藤　文　雄

例　言

1. 本書は宇都宮市旭1丁目3440番地16他に所在する「宇都宮城跡（平成18年度第４次調査）」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、調査主体者を宇都宮市教育委員会とし、調査実務は㈱日本窯業史研究所が調査団を組織してこれにあたった。株式会社穴吹工務店のマンション建設工事に伴う事前調査である。
3. 発掘調査は、平成19年2月9日から同年3月13日まで実施した。
4. 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、以下の体制で行った。

調査組織

宇都宮市教育委員会		㈱日本窯業史研究所	
教育長	伊藤文雄	調査統括	水野順敏
文化課長	渡辺　卓（前任）	主任調査員	新井　潔
	篠崎　茂（後任）	調査員	柏崎広伸
文化財保護グループ係長	梁木　誠（前任）		
	大塚雅之（後任）		
文化財保護グループ	前原義之		

5. 発掘調査及び整理作業・報告書作成において宇都宮市教育委員会からは種々の御協力を得た。また、下記の諸機関及び関係各位からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する（敬称略・順不同）。
今平利幸、神野安伸、富川　努、増山孝之（宇都宮市教委）、山下守昭（鵜ヶ島市立中央図書館）、茂木孝行（技研測量設計㈱文化財研究所）、安永真一（二宮町教委）、原　廣志（鎌倉市教委）、大沢伸啓（足利市教委）、前田育徳会尊経閣文庫、栃木県立博物館、㈱穴吹工務店、（有）大藤工業、樹山真司土地家屋調査士事務所、㈱ダイショー
6. 本遺跡の記録類・出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本遺跡の遺構は、掘立柱建物跡：SB、井戸跡：SE、土坑：SK、溝跡：SD、小穴：Pの略号で表した。
2. 第3図は国土地理院発行1/25,000『宇都宮西』・『宇都宮東』を部分複製した。
3. 遺構実測図の縮尺は原則として1/60（掘立1/80）に統一し、その他はそのつど明記した。また、遺物実測図の縮尺は原則として1/3とし、常滑系の甕や内耳土鍋等は1/4、その他はそのつど明記した。
4. 遺構観察表、小穴計測表の（　）は推定の大きさや形を示す。
5. 土層図中などで使用したスクリーントーンは次の通りである。

石　1号土壁　1号整地層　2号整地層

6. カワラケの編年は今平利幸　2001　「下野における中世土師器皿について」『栃木県考古学会誌』第22集、常滑系陶器の編年は中野晴久　1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』　小学館を参考にし、瀬戸・美濃系陶器、石硯については山下守昭氏、カワラケ類については今平利幸氏にご教示賜った。尚、表現・理解に誤りがあればすべて筆者の責に帰す。

目　次

序
Ⅰ　はしがき
1. 調査に至る経緯 ……1
2. 位置と環境
(1) 地理的環境 ……4
(2) 周辺の遺跡 ……4
(3) 歴史的環境 ……4
3. 調査の概要と調査の方法
(1) 調査の概要と経過 ……6
(2) 調査の方法と基本土層 ……7
Ⅱ　遺構と遺物
1. 掘立柱建物跡 ……10
2. 小穴 ……10
3. 溝跡 ……13
4. 井戸跡 ……19
5. 土坑 ……22
6. 西館堀 ……27
7. 土墓 ……34
8. 整地面 ……34
9. 調査区内出土遺物 ……35
Ⅲ　まとめ
中世 ……36
近世 ……37

挿　図　目　次

第1図　遺跡周辺の地形図
第2図　試掘調査と本調査範囲
第3図　周辺の遺跡
第4図　字都宮城想定図
第5図　基本土層図
第6図　調査区全体図
第7図　SB1～3平・断面図
第8図　SD1・2平・断面図
第9図　SD3～6、西館堀平・断面図
第10図　SB、P、SD出土遺物
第11図　SE1～4、SK15平・断面図
第12図　SE出土遺物
第13図　SK1～5・22・23平・断面図
第14図　SK6～9・11～13・17・18平・断面図
第15図　SK16・19・24・25平・断面図
第16図　SK出土遺物
第17図　1号土墓、1・2号整地面平・断面図
第18図　西館堀、1号土墓出土遺物
第19図　調査区内出土遺物
第20図　種類別板目状圧痕
第21図　城下絵図

表 目 次

第1表　周辺の遺跡
第2表　小穴計測表
第3表　遺構内出土遺物観察表
第4表　遺構内出土石製品・金属製品観察表
第5表　調査区内出土遺物観察表
第6表　調査区内出土石製品観察表

図 版 目 次

図版1　A. 調査前区全景（南東から） B. 本丸近景（南西から） C. 本丸と調査区近景（北から） D. 調査区遺構確認状況（南西から） E. 調査区全景（東から）
図版2　A. SB1～3全景（西から） B. SB1-P54b遺物出土状況（南から） C. P68遺物出土状況(南から） D. SD1土層（南から） E. SD1全景（南東から） F. SD2全景（南から） G. SD3～5土層（南から）
図版3　A. SD3・4全景（南東から） B. SD5・6、西館堀土層（北から） C. SD5、西館堀土層（南から） D. SD5・6、西館堀全景（南から） E. SD5遺物出土状況（南から） F. SD6遺物出土状況（南から） G. 西館堀遺物出土状況（西から） H. 西館堀骨出土状況（北から）
図版4　A. SE1土層（南から） B. SE1全景（南から） C. SE2土層（南から） D. SE2全景（南から） E. SE2底面状況（南から） F. SE3全景（南から） G. SE4土層（南から） H. SE4全景（南から）
図版5　A. SK1全景（南から） B. SK3・8・23全景（北から） C. SK4全景（西から） D. SK5全景（北から） E. SK6全景（南から） F. SK7全景（南から） G. SK9全景（南から） H. SK11全景（南から）
図版6　A. SK12全景（北から） B. SK13全景（西から） C. SK16全景（西から） D. SK16炭化物出土状況（西から） E. SK17全景（西から） F. SK18全景（南から） G. SK19全景（西から） H. SK22　全景（西から）
図版7　A. SK24土層（南から） B. SK24全景（南から） C. SK25全景（北から） D. 1号土塁、1号整地面土層（南西から） E. 2号整地面（東側）土層（南東から） F. 2号整地面（西側）土層（南西から） G. 市教委終了立ち会い風景　H. 調査風景
図版8　中世土器（カワラケ）
図版9　中世土器（カワラケ）
図版10　中世土器（カワラケ・内耳土鍋など）
図版11　中世土器
図版12　金属製品・石製品など
図版13　その他の遺物

Ⅰ　はしがき

1. 調査に至る経緯

宇都宮市旭１丁目3440番地16他にマンション建設が計画された。当該地は『栃木県埋蔵文化財地図』（平成９年３月）に「№3261、宇都宮城跡、城館跡」と記された周知の遺跡である。

宇都宮城跡は復元整備事業に伴う宇都宮城本丸跡の発掘調査が、平成元年から平成18年まで本丸公園都市計画決定区域を調査対象地区として宇都宮市教育委員会（以下市教委）により実施されている。調査の結果、古代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡、堀、溝跡、土坑、近世の土塁、堀等が確認されている。

そこで平成18年12月14･15日の両日、マンション建設予定地に対し市教委によって試掘調査が実施され、開発予定地の北東部で溝跡、土坑、西館堀の一部などを確認した（第2図）。また、その他広い範囲でカクランの状態を確認したが、ほぼ近世の西館堀の範囲に入るものと考えられた。この試掘調査の結果、遺構が確認された北東部の本調査が必要とされた。そこで市教委を調査主体者とし、調査実務は事業者（株式会社穴吹工務店）より委託を受けた㈱日本窯業史研究所がこれにあたった。

発掘調査の対象面積は約250㎡で、調査期間は平成19年2月9日～同年3月13日である。この間3月7日には市教委による立会いを受け、3月13日に埋め戻しを行い、野外調査をすべて終了した。

その後、平成19年11月20～22日には、マンション建設工事に伴う掘削時に市教委による立会調査が実施され、西館堀の範囲確認が行われている。

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

宇都宮城跡（西館堀地区）は宇都宮市旭１丁目3440番地16他に所在し、宇都宮市役所の南方約100m、東武線宇都宮駅から南東方約500mに位置する。

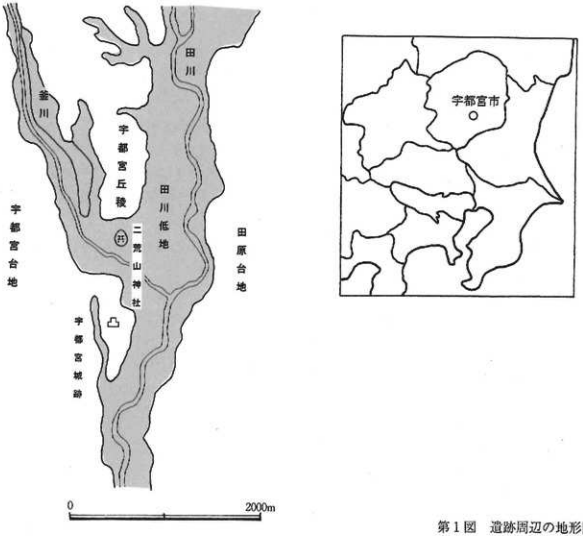
近世の宇都宮城は東西約1.2km、南北約1Kmと広大なもので、今次調査区となった西館堀はその中央やや南西、本丸より南西約200mに位置する。二の丸と堀を隔てた西脇、三の丸の南方に所在する逆三月状の郭（西館）を囲むのが西館堀で、この内側の立ち上がり部分（法面）が調査対象である。各種の城下絵図によれば、木材置場、譜請小屋との記載が多い。

宇都宮市は関東平野の北端に位置するとともに、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端に立地している。そのため、山地から平野部への転換点にあたり、以南は平野が広がっている。

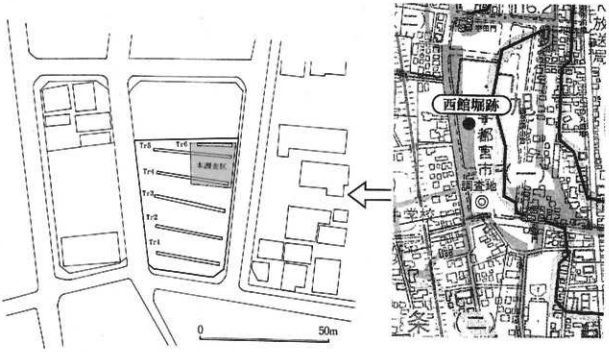
市内は南流する鬼怒川・田川・姿川などによって、岡本台地・田原台地・宝木台地などが形成されている。さらに、高館山を北端とする宇都宮丘陵が市内中心部の八幡山公園にむかって南北に走っている。

宇都宮丘陵は東側を田川、西側を釜川が南流しており、丘陵の西側には田川によって形成された田川低地が広がっている。また市内瓦谷町付近では、田川が形成する「横谷」によって丘陵が北部と南部に分けられ、丘陵東側は田川の侵食により崖面や開析谷が多くみられる。

宇都宮城跡は、この宇都宮丘陵の西を南北に延びる宇都宮台地の東端部に位置し、東と北に田川低地、西に小さな沢（低地）に挟まれた南向きの緩斜面に立地している（第1図）。今次調査区はこの周



第１図　遺跡周辺の地形図



第２図　トレンチ配置図と本調査区

竹林
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
卸売市場
川田町
西川田町

第3図　周辺の遺跡

囲を低地に囲まれた田川右岸で、標高113m程の平坦地に所在しており、宇都宮城跡の西館堀とその内側の土塁部分に想定された（第4図）。現状は市役所の南側に面した駐車場で、西館堀などの面影はなく、往時の様子は本丸の一部にしかその痕跡がみられない。

(2) 周辺の遺跡（第3図）

本跡は宇都宮台地の東端の張り出し部に位置し、城跡より古い時代の遺跡の立地にも適しており、発掘調査により各時代の遺構・遺物が確認されている。ここでは周辺の遺跡を第1表の一覧にまとめた。

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代・種別・その他
1	宇都宮城跡	本丸町1番他	本書。平成元年から公園整備に伴う調査が本丸を中心として行われる。
2	おしどり塚	一番町1-11他	鎌倉時代の塚跡。
3	二荒山神社遺跡	馬場通り1丁目1-1	古墳時代～平安時代の祭祀遺跡。
4	御蔵山古墳	塙田535他	古墳時代（中期）の前方後円墳。主体部に石槨がみられる。
5	八幡山古墳群	塙田5-1八幡山公園内	古墳時代（後期）の古墳群。一部主体部に横穴式石室がみられる。
6	祥雲寺境内古墳	東戸祭町1-1-16他	前方後円墳（全長40m、高さ5～6m）。前方部東隅に石材がみられる。
7	八幡山遺跡	大曽2丁目600他	旧石器が出土。
8	戸祭免田遺跡	戸祭町3634-1他	古墳時代の土師器の散布地。
9	戸祭山兜塚古墳群	戸祭町2608-3他	古墳時代（後期）の古墳（円墳）6基が確認されている。一部の主体部に横穴式石室がみられる。
10	山本山古墳群	山本町418他	古墳時代（後期）の古墳（円墳）2基が確認されている。昭和52年に調査され、横穴式石室が検出された。
11	和尚塚	戸祭町2丁目4-16他	室町時代の高塚。良渕和尚の墓と考えられている。
12	宝木古墳	一の沢町284他	古墳時代（後期）の古墳（円墳）。
13	鶴田西の宮遺跡	鶴田町3629-2他	縄文時代の集落跡。
14	鶴田中原遺跡	簗田町1124他	縄文時代、平安時代の集落跡。昭和53年に調査されている。
15	上鶴田南遺跡	鶴田町中原988-1他	奈良・平安時代の集落跡。
16	不動前3丁目遺跡	不動前3-3-827-1他	奈良・平安時代の集落跡。
17	地蔵遺跡	西原町188-3他	縄文時代（中・後期）の集落跡。昭和57年に調査されている。
18	不動前5丁目遺跡	不動前5-1-743-4他	奈良・平安時代の集落跡。
19	陽南1丁目遺跡	陽南1-2-691他	奈良～鎌倉時代の集落跡。
20	西原境遺跡	川田町1351他	縄文時代、古墳時代の集落跡。
21	本村遺跡	川田町44他	平成6年から数次に渡って調査され、弥生時代の住居跡が10件以上確認されている。古墳時代（中期）の古墳や道輪塔がみられ、主体部に一部箱式石槨がみられた。中世の地下式坑・竪穴遺構・井戸跡・溝跡・土坑などがみられた。
22	台内手遺跡	江曽島町台内手1277	古墳時代、奈良時代の集落跡。古墳も確認されている。
23	下栗大塚古墳群	下栗町1382他	古墳時代の径30m、高さ7mの円墳、他に小円墳あり。
24	東川田城跡	川田町大城内	以前は堀が残り、現状では土塁の一部が残る。
25	大山祇神社古墳	上横田町707他	古墳時代の径30m、高さ4mの円墳。
26	江曽島北遺跡	江曽島1324-19他	土師器の散布地。
27	江曽島北原南遺跡	江曽島町北原1402-1	縄文・奈良時代の集落跡。
28	関道遺跡	江曽島1152他	土師器・須恵器の散布地。
29	ガンセンター東遺跡	陽南3-12-914-137他	奈良・平安時代の集落跡。
30	韮松遺跡	江曽島町1057他	古墳～平安時代の集落跡。
31	雷電山遺跡	江曽島3丁目754-1他	古墳時代（中・後期）、戦国時代の集落跡。平成2年に調査されている。
32	江曽島城跡	江曽島3丁目754-1他	宇都宮氏の家臣江曽島氏の居城。

(3) 歴史的環境

宇都宮城跡の前身としてこの地に館跡が造られたのは、天慶3（940）年に藤原秀郷とする説や、康平年間（1058～65）年に宇都宮氏の祖藤原宗円とも言われ、諸説ある。

近年の本丸跡の調査により中世の出土遺物は13世紀半頃から16世紀までみられ、館跡のはじめは13世紀半ばまでその存在がさかのぼることができる。また、中世の堀が何回も掘り直されていることか

第4図　宇都宮城跡想定図

ら、戦国時代にその構えが大きくなっていったと考えられる。

しかし、慶長2（1597）年、宇都宮国綱は豊臣秀吉の命により改易され、宇都宮氏は滅亡した。

宇都宮氏滅亡後、城代として最初に浅野長政が入城した。その後入封した蒲生秀行は城の修復や城下町の基礎作りに着手したが数年で会津に移封される。次に奥平家昌が入封して以降、代々譜代大名の城地となった。奥平氏の後に本多正純が入封し、町割替えや城譜請を行うも、僅か3年で改易されてしまう。再び奥平氏が宇都宮に入り、二の丸東側の石垣、大手堀、西外郭などの整備を行い、近世宇都宮城の形がこの時期に整う。江戸期を通じて10数回にわたる領主替えが行われたが、戸田氏が2次期約130年にわたり領有し明治維新を迎えた。

江戸時代に10数回にわたる領主替に伴い、城下町の整備、拡大がなされ、多くの藩士が武家屋敷を構え居住していた。

戊辰戦争の際は本丸を初め多くの武家屋敷も焼失し、宇都宮城は廃城となった。

廃藩置県後、城跡は分割売却され、土塁や石垣は徐々に壊されて、堀跡が埋め立てられ、昭和（特に戦後）になってからその痕跡がほとんどみられなくなった。

3. 調査の概要と調査の方法

(1) 調査の概要と経過

調査は初日市教委立ち会いのもと表土層及び攪乱部分を重機で除去し、人力による遺構の精査を行った。その結果、掘立柱建物跡（SB）3棟、小穴（P）116口、溝跡（SD）7条（西館堀を含む）、井戸跡（SE）4基、土坑（SK）21口、土塁1箇所、整地層2箇所などを確認した。各遺構を掘り下げ、記録し、同時に遺物の取り上げを行っていった。出土遺物は、縄文時代の土器や石器類、古代の土師器や須恵器、瓦、中世を中心として近世までのカワラケや内耳土鍋、火鉢、陶器、金属製品、石製品、炭化物、骨など多岐にわたるが、総量は深型コンテナ5箱程であった。

本遺跡は市教委による試掘調査を平成18年12月14日～同年12月15日まで、日本窯業史研究所による本調査を平成19年2月9日～同年3月13日まで行った。以下に本調査の経過を記す。

2月9･10･13日　表土除去作業。

2月9･10日　遺構精査、確認状況の写真撮影。

2月13日　SK1～4・6･9･10･22･23、SD1、小穴の掘り下げ、SK6･10･22、SD1写真撮影。

2月15日　SK4･6･9･10･22･23、SD1、小穴の掘り下げ、SK1～4・6･9･10･22･23、SD1、調査区北壁・南壁の土層図作成。SK1、SD1、1号土塁写真撮影。グリット杭の設定。

2月16日　SK4･6･9･10･22･23、SD1、小穴の掘り下げ、SK4･8･12･23、SD1、P54b･56の土層図作成。SK4･6～9･10･12･23、SD1、P54bの写真撮影。

2月17日　SK5･6･24･25、SD3･4、小穴の掘り下げ、SK5･24･25、P4･57･65の土層図作成。P54b遺物取り上げ。SK5･6･24･25、P57･65の写真撮影。

2月19日　SK5･13･14･25、小穴の掘り下げ、D－2～D－4グリットの遺構平面図作成。SK13･25、P72･73の写真撮影。

2月20日　SK14、SD1、小穴の掘り下げ、D－2～D－4グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。SK14、SD5の写真撮影。

2月21日　SK11･14･16･18･19、小穴の掘り下げ。SK18、P86の土層図作成。SK11･13･14･16の写真撮影。

2月22日　SK11・13・18、小穴の掘り下げ、D－3・4グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。SK11・14・18、P72・73の土層図作成。SK11・16の写真撮影。

2月24日　SK11・13・18、小穴の掘り下げ、D－3・4グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。SK11・14・18、P72・73の土層図作成。SK11・16の写真撮影。

2月25日　SD5、西館堀の掘り下げ。

2月26日　SK16・18・19、SD2、西館堀、小穴の掘り下げ、C－4グリットの遺構平面図作成。

2月27日　SK16・19・25・26、SD5・6、西館堀、小穴の掘り下げ、C－3・4グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。SK25・26の土層図作成。SK16・25・26、SD6の写真撮影。

2月28日　SK16・18、SD5・6、西館堀、小穴の掘り下げ。B－3・C－3グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。調査区東壁の土層図作成。SK18、SD5・6、西館堀の写真撮影。

3月1日　SK15・20、SD5・6の掘り下げ。B－3・C－3グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。調査区北壁・東壁の土層図作成。SD3・4・5、西館堀の写真撮影。

3月2日　SK20・21、SD3・4、小穴の掘り下げ。B－3・C－3・4グリットの遺構平面図作成、遺物の取り上げ。SD3～6、西館堀の土層図作成。SK21、SD3～5、西館堀の写真撮影。

3月3日　SK15・19・20・2126、小穴の掘り下げ。SD5・6、西館堀の土層図作成。調査区内の清掃。SK4・15・19・21の写真撮影。

3月5日　SK26、SD5・6、西館堀の掘り下げ。調査区内の清掃。SK26、SD1～6、西館堀、調査区全景・遠景の写真撮影。

3月6日　SK14の掘り下げ。A－4・B－4グリットの遺構平面図作成。調査区内の清掃。小穴群、西館堀の写真撮影。

3月7日　SK10・14・21の掘り下げ。A－4・B－4グリットの遺構平面図作成。SK10・14・21の写真撮影。市教委による終了立ち会い。

3月8～10日　調査区内遺物の取り上げ。基本土層の掘り下げと土層図作成。平面図・土層図の補足。SD5、基本土層、調査区北壁・調査区東壁・調査区南壁各土層の写真撮影。

3月12・13日　調査区西側西館堀トレンチ拡張部の重機による掘り下げと堆積状況の記録。調査区の埋め戻し。現場撤収。

(2) 調査の方法と基本土層（第5図）

調査区は、開発区域中の西館堀内側約250㎡面積が対象地である。現況は駐車場、平均30cm程の厚さで砕石が敷かれ、その下は多くが撹乱を受けていた。調査は遺構を確認できる面までの表土などの除去を重機でおこない、平行して人力による遺構の確認作業を行った。

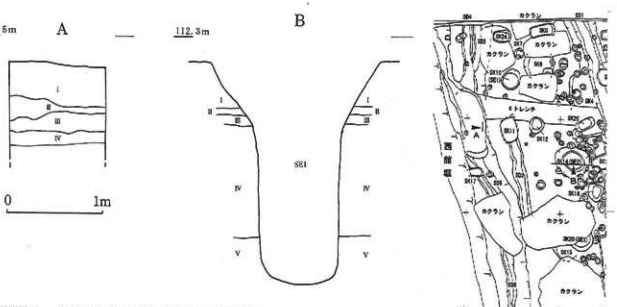
遺構の確認作業の後、確認状況の全景の写真撮影後、個々の遺構の掘り下げ及び土層・完掘写真撮影と図面の実測作業、完掘全景写真の撮影等を行った。また、調査区全体に調査の基準となるグリット杭を5×5mの方眼状に設定した。グリットは南西隅に原点を据え、南北軸（X軸）をアルファベット、東西軸（Y軸）を算用数字で表した。国家座標（第Ⅳ系）グリットA-1の座標数値はY軸1が4438m、X軸Aが61430mである。なお、グリットの南北軸は座標北を示しており、実測図上の北もこれを示す。

図面の縮尺は遺構平面図、土層図を1/20、全体図を1/100で作成し、場合によって適宜縮尺を変えた。

写真は各遺構を35㎜の白黒、リバーサルフィルム、デジタルカメラで撮影した。

本遺跡は、田川右岸の緩斜面に立地しており、南方向にゆるやかに傾斜している。調査区西半分は西館堀で中世の遺構が壊され、東側からのみ中世遺構が確認された。調査区東側も江戸期に西館堀内側の土塁築造のためローム層上層の土を取り、整地層を作っている。そのため、調査区東側の堆積状況は砕石層、撹乱層、表土層（江戸時代以降）、整地層、ローム層の順となる。そのため基本土層は自然堆積が残るローム層下で観察を行なった。

Ⅰ層は岡本ローム層、Ⅲは宝木ローム層、Ⅳは鹿沼軽石層、Ⅴ層は灰白色粘土層で、Ⅱ層は宝木ローム層上に岡本ローム層が堆積する際に、接点付近の還元力が弱く水分中の鉄分が酸化して赤化したものではないかと考えられる（註1）。Ⅰ～Ⅴ層の粒子やブロックが多くの遺構埋積土中に含まれていた。



Ⅰ層　明黄褐色土　(10YR7/6) 岡本ローム層　締まりあり、粘性ややあり。
Ⅱ層　橙色土　(7.5YR6/6) 岡本ローム層　締まりあり、粘性ややあり。
Ⅲ層　にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 宝木ローム層　締まりあり、粘性ややあり。瑪石粒（3～10㎜）が5%みられる。
Ⅳ層　にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 鹿沼軽石層　締まり強く、粘性ややあり。
Ⅴ層　灰白色粘土　(10YR7/1) 締まりあり、粘性強い。

第５図　基本土層図

註1

宇都宮市教育委員会の宮川努氏より御教示を頂いた。

引用・参考文献

宇都宮市教育委員会　1983　『宇都宮の遺跡』

宇都宮市教育委員会　1989　『宇都宮の旧跡』

宇都宮市教育委員会　1997　『宇都宮遺跡地図』

栃木県立博物館　2006　『名城　宇都宮城－しろとまちの移り変わり』

栃木県企画部資料対策室　1960　『土地分類基本調査　宇都宮』

SD4
カクラン
SD1
SK22
SK24
SK6
SK1
SB3
SB1
SB2
SD3
SK7
カクラン
カクラン
SK2
SK9
SK10
(SE1)
SK8
カクラン
SK23
SK4
SK3
5トレンチ
SK25
SK11
SK12
SK5
西
舘
堀
SK14 (SE2)
SK13
SK17
SD5
SD2
SK16
SK18
カクラン
カクラン
SK20 (SE3)
SK15
SK19
SD6
カクラン
カクラン
SK21 (SE4)
カクラン
N
D
C
B
A
0
5 m
1
2
3
4

第6図　調査区全体図

Ⅱ　遺構と遺物

中・近世

1. 掘立柱建物跡

今次調査区は約250㎡のうち48％程が近世の西館堀が占めており、堀以外の遺構を調査し得たのは約130㎡である。なお、この部分は堀の直ぐ内側であったことから、堀の開削以降は土塁の下となっていて、建物等の施設は設けられなかったと推察される。今次調査では掘立柱建物の柱掘り方と推定される大・小の小穴を約120口程確認した。その大部分は調査区の東端に集中しており、ある程度の間隔をもってまとまりが見られることから、同様の建物が繰り返し建てられたと推定し得る。これらの小穴群は西寄りの西館堀の間際では分布が疎となり、小穴の集中する付近が各建物跡の西辺にあたるものと思われる。

この小穴の集中部分が調査区の東端に位置することに加え、多数の遺構、土坑、井戸跡などが所在する。さらには、径1.5～3.5mの近・現代の撹乱穴が随所に穿たれていて、建造物を想定するのが非常に困難な状況にあった。類似の規模・形状の建物が近い位置で建て替えられた為か、図上では6尺、7尺、8尺弱等の同一間隔で並ぶ2間程度の南北方向の柱穴列を想定しようとすると、撹乱穴・他の遺構との重複や調査区外となってしまい、確証を得難い状況であった。

したがって、無闇に想定を図示することは砂上の楼閣になりかねず、ここでは3棟（SB1～3）を示すが、これらも北西の一部と推定される。

1号掘立柱建物

遺構（第7図、図版2）

C－4・D－4グリットにわたって位置し、SK3・4・23、SD1、P19・20・26・55・68・71～73・97と重複し、P54aはSK4にきられている。南北に235cm（約7.8尺）間隔で、並ぶ3間（705cm）の柱穴列（北よりP2・54b・94・73a）と北端のP2より東に約165cm（5.5尺）のP1、北より2・3本目（P54b・94）よりそれぞれ東に約235cmに位置する2口（P60・77）より想定した。棟方位はN－5°－Wで、SD3・4に近い。なお、南端のP73aより南約680cmの延長線上にP47が所在する。この間の柱穴想定位置にそれぞれ撹乱があり推定の域を出ないが、3等分すると各227cm（約7.5尺）、北寄りの2間が北側と同じ235cmと仮定すると南端が210cm（約7尺）と推定することも可能である。しかし、いずれも東側が地区外となり展開が確認できず、西側への展開も認められなかった為、図示し得かった。

柱掘り方は、北側の2口は平面が円形もしくは丸味を帯びた方形で径25～30cm、深さ30～35cmであるのに対し、他は平面が円形もしくは楕円形で径が45～50cm、深さ50～70cmと確りしていた。土層観察から柱の直径は25cmと判断される。また北側2口が付属施設で他が身舎と思われる。また、身舎の北西隅と推定されるP54bの柱痕跡底面付近より円形の銅版に削られた状態の数片の銅板が重なって出土し、精査の結果2点の懸仏（御正体）と判明した。出土状況から推して、地鎮の目的で埋納されたものと推察される。

遺物（第11図、第3・4表、図版8・12）

P2より陶器の細片、P73よりカワラケや常滑系の甕の破片が10数点出土した。P54bより懸仏が2点出土した。

P73－1はカワラケで、底部外面糸切り後板目状圧痕あり。P54b－2・3は懸仏で、2は少し歪んで楕円

形になっており、最大幅推定12cm。3は円形で推定径8cm。それぞれ厚さ0.5mm程の銅版の裏から釘状の先の尖ったもので如来像を打ち出している。2には紐の断片が付着し、3には上方やや左寄りに径2mm程の小孔がみられた。

2号掘立柱建物

遺構（第7図、図版2）

C－4・D－4グリットにわたって位置し、SK4、SD1、P54・57a・73・79・80・81・94・95と重複する。南北に230cm（約7.8尺）間隔で、並ぶ3間（690cm）の柱穴列（北よりP57・55・19・97）と北端のP57より東に約240cm（約8尺）の位置にあるP3などより想定した。他の3口は東側の想定位置が調査区外となり展開を確認し得ず、いずれも西側への展開は認められない。南側への延長も攪乱により確認できなかった。棟方位はN－3°－Wで、SD3・4に近い。

柱掘り方は、平面が径30～40cmの円形で、深さ50～80cm。柱痕跡は明瞭でなかった。P97の確認面で径約10cm、長さ20cm程の細長い川原石が1点認められたが、出土状況から建物の廃棄後に投棄されたと推察される。

遺物（第11図、第3表）

P19よりカワラケや内耳土鍋の破片が10点弱出土した。

1はカワラケで、ロクロ整形。

3号掘立柱建物

遺構（第7図、図版8）

C－4・D－4グリットにわたって位置し、SK4・14・25、SD1、P33と重複し、P117はSD1に切られている。南北に210cm（約7尺）間隔で延びる4間（約860cm）の柱穴列（北よりP117・115・75・88）を想定した。なお、P115と75の間の掘り方はSK25との重複で失われたと推定した。北は調査区外となり、南はSE3、その南は攪乱と重なり想定し難い。また、左・右（西・東）への展開も確認できなかった。棟方位はN－5°－Wで、SB1・2に近い。

柱掘り方は、平面が径20～30cmの円形で、深さ30～40cm程である。柱痕跡は明瞭でなかったが、建物跡もしくはなんらかの構造物と推定される。

遺物

遺物の出土はない。

2．小穴

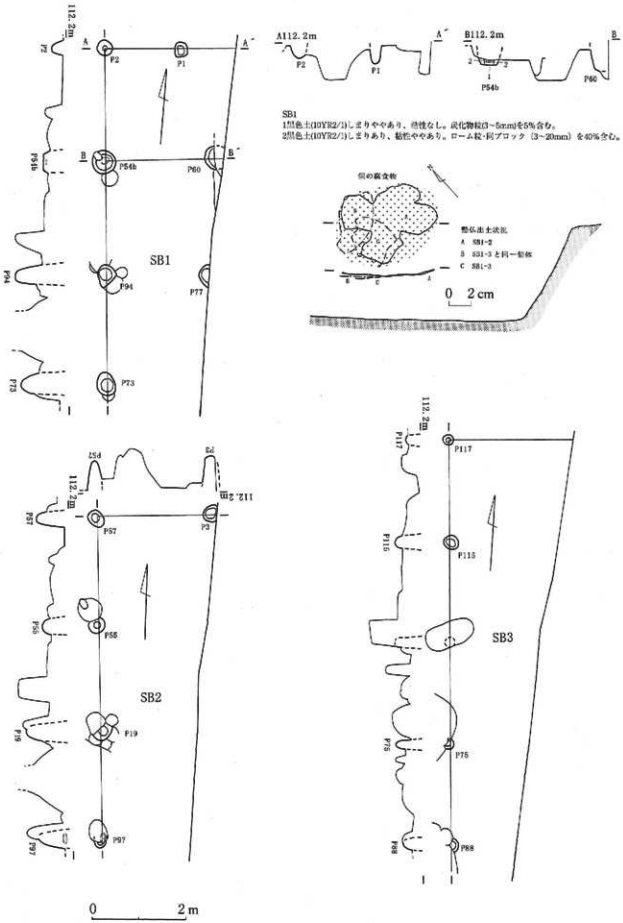
遺構（第6図、第2表）

調査区全体でP122口まで遺構番号を付し、SB1～3の柱穴を除くと小穴116口を数える。個々の詳細については一覧表を参照されたい。

遺物（第11図、第3表、図版8）

図示し得たのは以下のものである。

P33－1・P65－1・P67－1・P68－1～3・P76－1はカワラケで、P33－1・68－1～3は底部糸切り。P65－1は内外面カーボン付着し灯明皿か。P68－3の時期は5期と考えられる。



第7図 SB1～3平・断面図

3. 溝跡

1号溝

遺構（第8図、図版2）

D−4·C−4グリットにまたがって位置し、北側と東側は調査区外に延びている。SK4·5·8·13、P2·52·53·56·57a·57b·58·59·65a·65b·77·78·99·114·117·118と重複し·SK4·5·8·13·16、P56·77に切られる。確認長は8.9mで、上面幅66〜68cm、深さ30〜32cm、断面は逆台形である。底面はほぼ平らある。主軸方位はN−18°−Wである。

埋積土は、上層が褐色土主体で、中層は暗褐色土、下層が黒色土。中層は上層よりロームや軽石の粒子やブロックが多くみられる。

遺物（第10図、第3表、図版8·13）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器甕（常滑系）、天目茶碗（細片）の破片など80数点と縄文土器片3点、石器2点が出土した。

1·2はカワラケで、2の外面に墨書らしきものあり。1は6〜7期、2は7期と考えられる。3は捏鉢の底部で、内面は摩滅し、外面に板目状圧痕あり。4は常滑系の口辺部で、時期は9型式と考えられる。

2号溝

遺構（第8図、図版8）

B−3·C−3グリットにまたがって位置し、北側はSK11、南側は撹乱に壊されている。SK11、P1と重複し、SK11に切られている。確認長は4.1mで、上面幅27〜37cm、深さ5cm程、断面は逆台形である。底面はほぼ平らで、凹凸がみられる。主軸方位はN−11°−Wである。

埋積土は灰褐色土の単層。

遺物

遺物はカワラケの破片が5点出土したが、小片であるため図示し得なかった。

3号溝

遺構（第9図、図版2·3）

D−3グリットに位置し、北側は調査区外に延び、南側はSD4に壊されていた。SD4と重複し、切られている。確認長は3.78mで、上面幅100cm程、深さ50〜52cm、断面は逆台形である。底面はほぼ平らで、北から南へなだらかに低くなっていた。主軸方位はN−7°−Wである。

埋積土は上層が黒褐色土で、下層は褐色土が主体で、上層より下層にロームや軽石の粒子やブロックが多くみられる。

遺物

遺物の出土はない。

4号溝

遺構（第9図、図版3）

D−3グリットに位置し、北側は調査区外に、南側はSD5に壊されていた。SD3·5·西館堀と重複し、SD3を切り、SD5·西館堀に切られている。確認長は3.7mで、上面幅41〜54cm、深さ13〜25cm、断面

は逆台形である。底面はほぼ平らで、南から北へなだらかに低くなっていた。主軸方位はN－3°－Wである。

埋積土は黒褐色土が主体である。

遺物

遺物は須恵器の壺の破片が1点出土したが、流れ込みと考えられる。

5号溝

遺構（第9図、図版3）

A－3・B－3・C－3・D－2・D－3グリットにまたがって位置し、北と南側は調査区外に延びている。SD4・6・西舘堀、SK17、P106・113・122と重複し、SK17、SD4・6を切り、西舘堀に切られている。確認長は直線で17m、上面幅125cm程、深さ22～66cmで、断面は逆台形である。底面はほぼ平らである。主軸方位はN－16°－Wである。

埋積土は上層、中層が褐灰色土、下層が暗褐色土で、上層は粘土粒がみられ、下層の一部にロームブロックが大半を占める部分がみられた。

また、溝の北半部に当初SK26としていた上面径が推定375×143cm、下面径が335×115cm、平面は楕円形で、深さ109cm、底面は丸底。断面は弧状で、東壁は袋状、埋積土は上層が黒褐色土、下層は黒色土が主体で、上層中に壁の崩落した層が部分的にみられる土坑状のものをSD5の一部と考えることとした。

遺物（第10図、第3・4表、図版8・10・11・13）

遺物は溝の埋積土中よりカワラケ・内耳土鍋、陶器の捏鉢や甕（常滑系）、碗類（瀬戸・美濃系）の破片が50点弱、茶臼の破片と打製石斧が各1点出土した。旧SK26より遺物はカワラケ、内耳土鍋、甕（常滑系）、皿・碗・瓶（瀬戸・美濃系）の破片が100点程出土した。

1～5はカワラケで、2は底部糸切り後ヘラ削り。3は内外面、4は内面にカーボン付着し、それぞれ灯明皿か。1は6～7期、2は6期、4は6～7期、5は7期と考えられる。6～9は内耳土鍋で、6・8・9は外面、7は内外面にカーボン付着し、底部外面は砂粒付着。10は捏鉢。11～14は瀬戸・美濃系の灰釉で、11・12は碗、13は瓶、14は三足盤。15は茶臼の下臼受皿の破片。11・13・14の時期は施Ⅳ期。

6号溝

遺構（第9図、図版11）

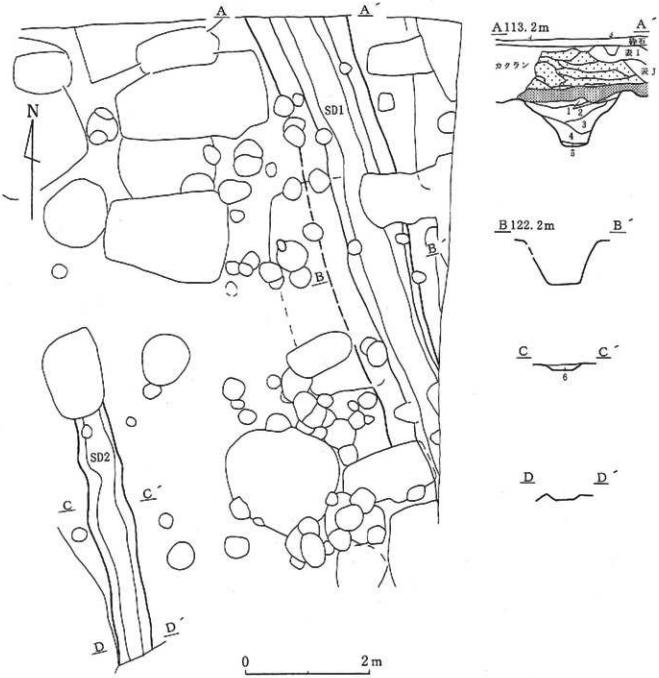
A－3・B－3・C－3グリットにまたがって位置し、北側は西舘堀、南側は調査区外に延びている。SK17・26・SD5・西舘堀と重複し、SK17・26・SD5・西舘堀に切られている。確認長は直線で12m、上面幅35～61cm、深さ7～10cmで、断面は逆台形である。底面はほぼ平らである。主軸方位はN－16°－Wである。

埋積土は褐灰色土の単層。

遺物（第10図、第3表、図版11）

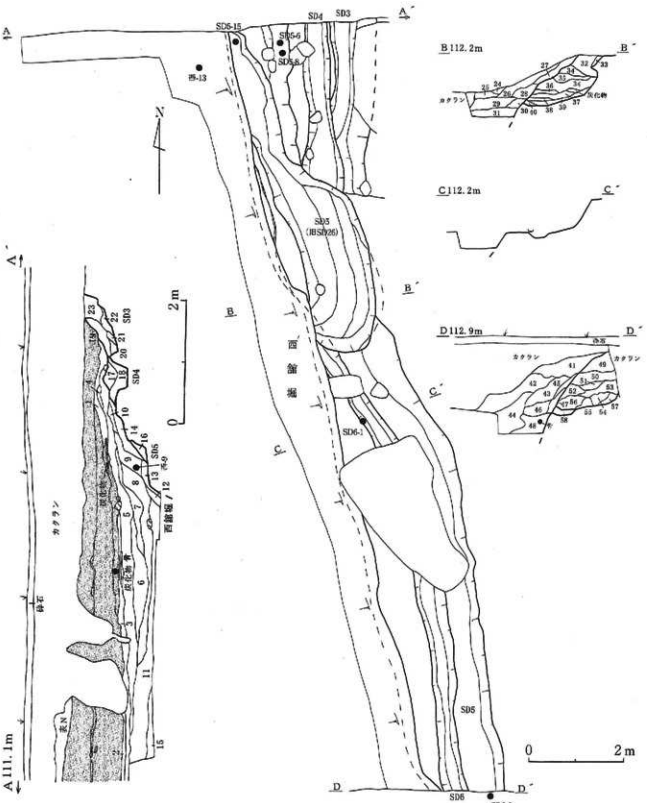
遺物は陶器の皿が1点出土した。

1は瀬戸・美濃系の灰釉の皿。時期は施Ⅳ期。



SD1
1黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3～10mm）を20%含む。
2にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・岡ブロック（3～15mm）を15%含む。
3暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・岡ブロック（3～20mm）を30%含む。
4暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・岡ブロック（3～20mm）を40%含む。
5黒色土(10YR2/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒（3～10mm）を10%含む。
SD2
6灰褐色土(10YR4/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・岡ブロック（3～10mm）を20%含む。

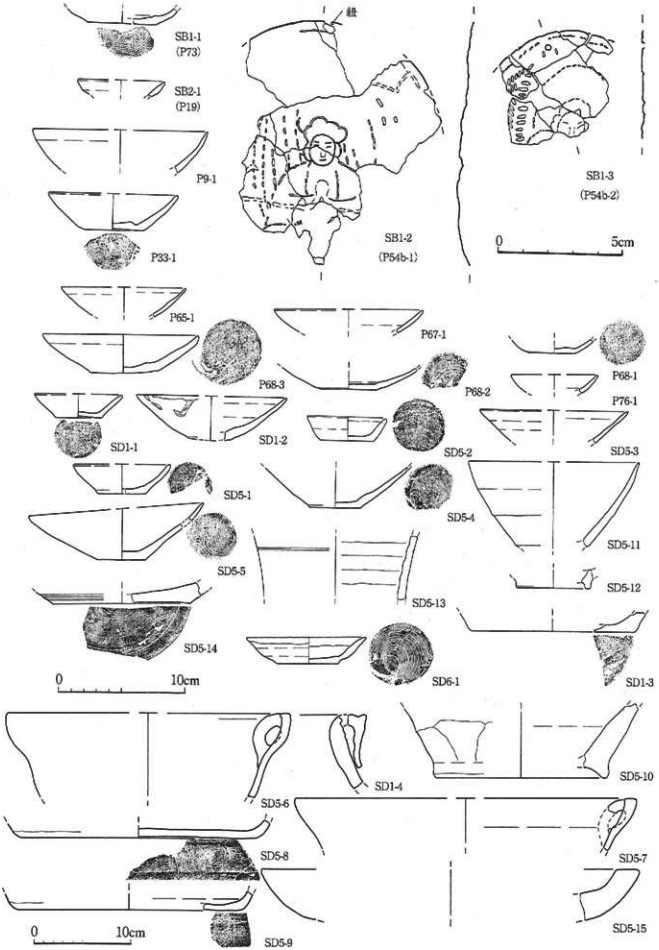
第８図　SD1･2堀平･断面図



第9図　SD3～6・西館堀平・断面図

第9図SD3～6・西館堀土層

西館堀　1黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、粘土粒、軽石粒、炭化粒粒（3～10mm）を20%含む。
2黒色土(10YR2/1)しまり、粘性あり。ローム粒、軽石粒、（3～5mm）を10%含む。
3黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。炭化物粒(5～20mm)を20%含む。一部帯状にみられる。
4灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性あり。褐石粒、粘土粒（3～5mm）を30%含む。
5灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性あり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を30%含む。
6灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性あり。ローム粒、軽石粒、焼土粒（3～10mm）を30%含む。
7灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性あり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。
8黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、粘土粒（3～5mm）を30%含む。
9黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒、粘土粒（3～10mm）を20%含む。
10黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒、粘土粒（3～10mm）を30%含む。
11黒褐色土(10YR3/2)しまり強い、粘性あり。褐石粒、粘土粒・同ブロック（3～20mm）を20%含む。
12黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性あり。軽石粒、焼土粒（3～5mm）を20%含む。
13黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、褐石粒、粘土粒（3～10mm）を20%含む。上面が焼き土状に変色。
14黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、焼土粒・同ブロック（3～20mm）を20%含む。
15黒褐色土(10YR2/2)しまり強い、粘性あり。ローム粒、褐石粒・同ブロック（3～20mm）を30%含む。
SD6　16黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。軽石粒、粘土粒（3～5mm）を20%含む。
SD4　17黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、同ブロック、軽石粒、焼土粒・同ブロック（3～20mm）を30%含む。
18黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒（3～10mm）を30%含む。
SD3　19黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、褐石粒、粘土粒（3～5mm）を30%含む。
20にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3～20mm）を50%含む。
21黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、褐石粒、粘土粒（3～10mm）を30%含む。
22灰黄褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、焼土粒（3～10mm）を50%含む。
23にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒・同ブロック、焼土粒・同ブロック（3～20mm）を50%含む。
西館堀　24黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。軽石粒（3～10mm）を5%含む。
25黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。軽石粒、粘土粒・同ブロック（3～20mm）を20%含む。
26黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。軽石粒（3～10mm）を10%含む。
27黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。粘性ややあり。軽石粒（3～10mm）を40%含む。
28黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。軽石粒（3～10mm）を30%含む。
29黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。粘性ややあり。褐石粒、やや炭焼子（3～7mm）を30%含む。
30黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。粘性ややあり。褐石粒（3～10mm）を30%含む。
31黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。褐石粒（3～5mm）を20%含む。
SD5　32黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。粘性ややあり。褐石粒（3～10mm）を40%含む。
33黒褐色土(10YR3/2)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒、褐石粒・同ブロック（3～20mm）を40%含む。
34黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性なし。軽石粒・同ブロック（3～100mm）が大半（50%以上）を占める。
35黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。軽石粒・同ブロック（3～30mm）を40%含む。
36黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。軽石粒（3～10mm）を10%含む。
37黒褐色土(10YR3/1)しまりややあり、粘性あり。褐石粒、炭化物粒、やや炭焼子（3～20mm）を20%含む。
38黒色土(10YR2/1)しまりなし、粘性ややあり。褐石粒（3～5mm）を10%含む。
39暗色土(10YR4/4)しまりなし、粘性あり。ローム土が大半（50%以上）を占める。
40黒色土(10YR2/1)しまりなし、粘性ややあり。褐石粒・同ブロック（3～30mm）を30%含む。
西館堀　41黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、炭化物粒（3～10mm）を30%含む。
42褐灰色土(10YR4/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。
43褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、褐石粒（3～10mm）を30%含む。
44灰黄褐色土(10YR5/2)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、軽石粒、円礫、（3～50mm）が大半（50%以上）を占める。
45黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性あり。ローム粒、褐石粒、粘土粒（3～10mm）を20%含む。
46黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。
47黒褐色土(10YR3/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、粘土粒（3～5mm）を20%含む。
48黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性あり。ローム粒（3～5mm）を5%含む。
SD5　49褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。褐石粒、粘土粒（3～10mm）を30%含む。
50灰黄褐色土(10YR5/2)しまりややあり、粘性あり。ローム粒・同ブロック、焼土粒（3～20mm）を40%含む。
51褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、焼土粒（3～5mm）を20%含む。
52褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、焼土粒（3～5mm）を30%含む。
53褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、焼土粒（3～10mm）を30%含む。
54褐灰色土(10YR4/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒、炭化物粒（3～10mm）を20%含む。
55褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒（3～5mm）を20%含む。
56褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒・同ブロック（3～50mm）が大半（50%以上）を占める。
57褐灰色土(10YR4/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3～10mm）を30%含む。
SD6　58褐灰色土(10YR4/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3～5mm）を30%含む。



第10図　SB、P、SD出土遺物

3. 井戸跡

1号井戸

遺構（第11図、図版4）

D−3グリットに位置し、調査区中央のやや北側で、SK11の北側にある。規模は上面径が99×96cmで、平面は円形である。深さ220cm以上、断面は「Uの字」形であると想定される。

埋積土は上層が暗褐色土で、下層がローム粒子や同ブロックが大半を占めていた。最下層部にはロームの粒子や同ブロックとともに径20cm前後の川原石や凝灰岩が20数点混入し、一部熱を受けているものもみられた。これらのことから人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物（第12図、第3・4表、図版9・11・12）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）、瓦質火鉢、砥石、硯の破片が20数点出土した。

1～3はカワラケで、1・3は底部外面に板目状圧痕あり。1の時期は6・7期と考えられる。4・5は常滑系の甕で、4の時期は6b期と考えられる。5は外面に灰釉や押印（菊花文）がみられた。6～8火鉢で、同一個体。外面に押印（巴文・菊花文・雷文）がみられる。9は蝉様硯の破片（海部）。10は研面4面の砥石（砂岩製）で、一部被熱。

2号井戸

遺構（第11図、図版4）

C−3・C−4グリットにまたがって位置し、調査区中央のやや東寄りで、SK13の西側にある。P25・27・68・72・74・75・80・95と重複し、P25・27・68に切られている。規模は上面径が182×162cm、下面径が44×39cmで、平面は楕円形である。深さ214cm、断面は漏斗形で、底面は丸底。主軸方位はN−59°−Eである。

埋積土は上層が黒褐色土で、これより下層がロームや軽石の粒子や同ブロックが大半を占めており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物（第12図、第3表、図版9）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が50点程出土した。

1・2はカワラケで、1は底部糸切り、2は底部糸切り後ヘラ削り。1・2の時期は6期と考えられる。

3号井戸

遺構（第11図、図版4）

B−4グリットに位置し、調査区中央のやや南寄りで、北半分が撹乱に壊されている。SK15と重複し、切っている。規模は上面径推定120cmで、平面は円形と考えられる。深さ75cm以上で、断面は漏斗形と考えられる。

埋積土は黒褐色土の単層。

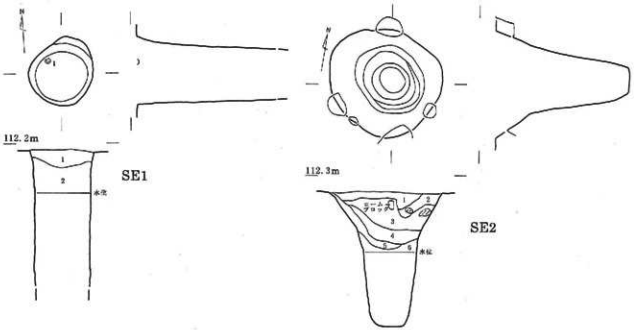
遺物（第12図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が20数点出土した。

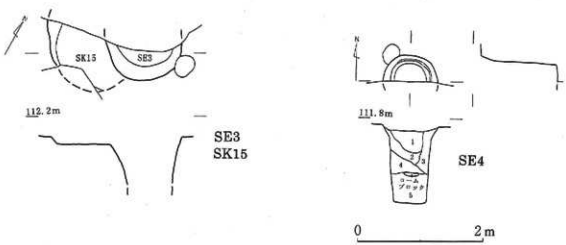
1はカワラケで、ロクロ整形、底部糸切り。

4号井戸

遺構（第11図、図版4）

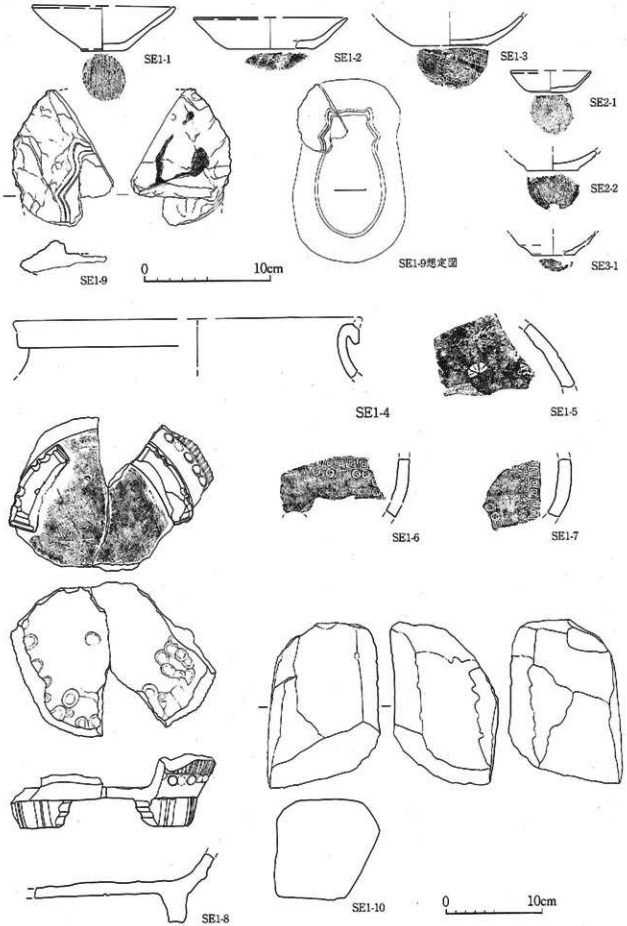


SE1
1暗褐色土(10YR3/3)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～20mm）を30%含む。
2暗褐色土(10YR3/3)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～50mm）を50%含む。
SE2
1にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3～10mm）を20%、炭化物粒（5～10mm）を3%含む。
2暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を30%含む。
3にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりなし、粘性あり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3～20mm）を40%含む。
4にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまりなし、粘性あり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3～20mm）が大半（50%以上）を占める。
5暗褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒・同ブロック、（3～30mm）を15%含む。
6灰褐色土(10YR5/6)しまりなし、粘性あり。ロームブロック、軽石ブロック、粘土ブロック（20～100mm）が大半（50%以上）を占める。



SE4
1黒色土(10YR2/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。
2黒色土(10YR2/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒・同ブロック（3～10mm）を30%含む。
3にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を40%含む。
4にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）が大半（50%以上）を占める。
5黒色土(10YR2/1)しまり、粘性あり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。

第11図　SE1～4・SK15平・断面図


SE1-1
SE1-2
SE1-3
SE2-1
SE2-2
SE3-1
SE1-9
0
10cm
SE1-9想定図
SE1-4
SE1-5
SE1-6
SE1-7
SE1-8
SE1-10
0
10cm

第12図　SE出土遺物

A－4グリットに位置し、調査区南端の東寄りで、南半分が撹乱に壊されている。P48と重複している。規模は上面径が86cmで、平面は円形と考えられる。深さ122cmで、断面は漏斗形である。

埋積土は上層と下層が黒色土主体で、中層がロームや軽石の粒子や同ブロックを多く含む褐色土であった。

遺物

遺物は出土しなかった。

5. 土坑

1号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK2·22と重複し、SK2を切り、SK22に切られている。規模は上面径が100cm以上×59cm、下面径が90cm以上×45cmで、平面は長方形と考えられる。深さ5cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形で、主軸方位はN－84°－Eである。

埋積土は黒色土が主体である。

遺物

遺物はカワラケの破片が2点みられたが、小片であるため図示し得なかった。

2号土坑

遺構（第13図）

D－4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK1·8·22、P3と重複し、SK8·22·P3を切り、SK1に切られる。規模は上面径が280×100cm以上、下面径が275×183以上cmで、平面は長方形と考えられる。深さ20cm程で、底面はほぼ平ら。断面は逆台形で、主軸方位はN－4°－Wである。

埋積土は暗褐色土が主体である。

遺物

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が20数点出土したが、図示し得なかった。

3号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK23·SD5と重複し、切られる。平面は長方形と考えられる。深さ20cm程で、底面はほぼ平ら。壁は緩やかに立ち上がる。

埋積土は褐色土が主体である。

遺物（第13図、第3表）

遺物はカワラケの破片が数点出土した。

1はカワラケで、ロクロ整形。

4号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4·C－4グリットに位置し、調査区の北東にある。SK5·25、SD1、P7a·7b·26·54a·54b·55·56·59·61·65a·65b·66·79と重複し、SK25、SD1、P54a·54b·56を切る。規模は上面径が推定340×205cm、

下面径が推定315×190cmで、平面は隅丸長方形と考えられる。深さ33cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形で、主軸方位はN－10°－Wである。

埋積土は暗褐色土が主体である。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が50数点出土した。

1･2はカワラケで、ロクロ整形。3は常滑系の甕で、内面に黒色物が見られる。

5号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4グリットに位置し、調査区中央の東端にあり、SD1･P65a･77･78と重複し、SD1･P77を切る。規模は上面径が100cm程、下面径が95cmで、平面は長方形と考えられる。深さ35cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形である。

埋積土はにぶい褐色土と灰褐色土が主体である。

遺物（第16図、第3表、図版9）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が10数点出土した。

1はカワラケで、内面が摩滅し、墨書らしきものがみられる。時期は6･7期と考えられる。2･3は常滑系の甕で、2の時期は9型式と考えられる。3の外面に押印（菊花文）がみられる。

6号土坑

遺構（第14図、図版5）

D－3グリットに位置し、調査区中央の北端にあり、SK24の東側にある。規模は上面径が133×60cm、下面径が113×50cmで、平面は長方形。深さ80cmで、底面はほぼ平ら。断面は「Uの字」形で、主軸方位はN－77°－Eである。

埋積土は暗褐色土が主体で、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表、図版9）

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が10数点出土した。

1～3はカワラケで、1の底部外面や2の内外面にカーボン付着。1･3は底部糸切り。

7号土坑

遺構（第14図、図版5）

D－3グリットに位置し、調査区中央の北寄りにあり、SE 1の北側に隣接する。規模は上面径が58×53cm、下面径が38×28cmで、平面は楕円形。深さ15cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形で、主軸方位はN－7°－Wである。

埋積土は黒褐色土の単層である。

遺物

遺物は土師器（内黒）の細片が1点出土したが、図示し得なかった。

8号土坑

遺構（第14図、図版5）

D−4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK2・4・23・SD1と重複し、これらを切る。規模は上面径が345以上×80cm、下面径が143cm以上×100cmで、平面は隅丸長方形と考えられる。深さ80cmで、底面はほぼ平ら。断面は袋状。主軸方位はN−81°−Eである。

埋積土は暗褐色土が主体で、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が30数点出土した。

1、2はカワラケで、2は底部糸切り。

9号土坑

遺構（第14図、図版5）

D−3グリットに位置し、調査区中央の北寄りにある。撹乱で北端と南端が壊されており、P62・63と重複している。規模は上面径が172cm、下面径が70cmで、平面は円形と考えられる。深さ30cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形である。

埋積土は暗褐色土が主体である。

遺物（第16図、第3表、図版11）

遺物はカワラケ、陶器（瀬戸・美濃系）の破片が3点出土した。

1は瀬戸・美濃系の灰釉のおろし皿で時期は施Ⅳ期。

11号土坑

遺構（第14図、図版5）

D−3グリットに位置し、調査区ほぼ中央にある。SD2と重複し、これらを切る。規模は上面径が124×82cm、下面径が135×90cmで、平面は隅丸長方形である。深さ90cmで、底面はほぼ平ら。断面は袋状で、主軸方位はN−20°−Wである。

埋積土は黒褐色土が主体で、底面近くに薄く黒色土がみられた。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、陶器の甕（常滑系）や土師器・縄文土器の破片が30数点出土。

1・2はカワラケで、1の底部に板目状圧痕がみられる。

12号土坑

遺構（第14図、図版5）

D−3グリットに位置し、調査区のほぼ中央にある。P82と重複する。規模は上面径が83×74cm、下面径が55×52cmで、平面は円形である。深さ50cmで、底面はほぼ平ら。断面は「Uの字」形で、主軸方位はN−19°−Eである。

埋積土は暗褐色土が主体で、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表）

遺物は内耳土鍋片が3点出土した。

1は内耳土鍋で、外面にカーボン付着。

13号土坑

遺構（第14図、図版6）

C−4グリットに位置し、調査区中央の東端にある。SD1・P17・67・69・76・96と重複し、SD1を切る。規模は上面径が155×74cm、下面径が134×65cmで、平面は長方形である。深さ50cmで、底面はほぼ平ら。断面は「Uの字」形で、主軸方位はN−72°−Eである。

埋積土は上層が褐色土、下層は黒褐色土がみられた。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が10数点出土した。

1は常滑系の甕で、時期は9型式。

15号土坑

遺構（第11図）

B−4グリットに位置し、調査区中央の東寄りにある。SE3と重複し、これに切られる。規模は上面径が推定150cmで、平面は円形と考えられる。深さ11cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形である。

埋積土は黒褐色土の単層である。

遺物

遺物は出土しなかった。

16号土坑

遺構（第15図、図版6）

B−4グリットに位置し、調査区中央の東端にある。P91b・92・102・104・105・107と重複し、P107に切られ、P92を切る。規模は上面3.5×0.8m以上で、平面は長い長方形と考えられる。深さ70cmで、底面はほぼ平ら。断面は北壁が底面から垂直に立ち上がり途中で開き、南壁は外傾する。主軸方位はN−11°−Wである。

埋積土は上層が灰褐色土、褐色土、中層が黒褐色土、下層は褐色土が主体で、中層・下層には大小の川原石（一部被熱）や遺物が多くみられ、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表、図版9・11）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）や土師器の破片が100点弱出土した。

1〜4はカワラケ。2・3は底部糸切り後板目状圧痕がみられる。4の内面に墨書（梅か？）がみられる。1の時期は6〜7期、3は5期、4は6期と考えられる。5は常滑系の甕で、時期は9型式と考えられる。

17号土坑

遺構（第14図、図版6）

C−3グリットに位置し、調査区のほぼ中央にある。SD5・6・西館堀と重複し、SD5・6を切り、西館堀に切られる。規模は上面径が推定85×45cm、下面径が推定70×37cmで、平面は長方形と考えられる。深さ33cmで、底面はほぼ平ら。断面は「Uの字」形で、主軸方位はN−7°−Eである。

埋積土は黒褐色土が主体で、底面近くに薄く黒色土がみられた。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器（瀬戸・美濃系）の破片が10数点出土した。
1はカワラケで、ロクロ整形。2は瀬戸・美濃系の灰釉の瓶。時期は施Ⅳ期。

18号土坑

遺構（第14図、図版6）

C－4グリットに位置し、調査区中央の東側にある。P85・102と重複する。規模は上面径が推定110×82cm、下面径が63×40cmで、平面は楕円形と考えられる。深さ47cmで、底面は凹凸あり、ほぼ平ら。断面は弧状形で、主軸方位はN－10°－Eである。

埋積土は黒褐色土が主体で、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が20数点出土した。

1はカワラケで、ロクロ整形。

19号土坑

遺構（第15図、図版6）

B－4グリットに位置し、調査区南の東端にある。P36・37・109・110と重複する。規模は上面径が448×79cm、下面径が430×70cmで、平面は長方形である。深さ33cmで、底面はほぼ平ら。断面は「Uの字」で、主軸方位はN－5°－Wである。

埋積土は褐色土が主体で、中層には上層より多くのローム粒子や同ブロック・炭化物粒を含む。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が30数点出土した。

1はカワラケで、ロクロ整形。

22号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK1・2と重複し、SK2に切られる。規模は上面径が135cm以上で、平面は長方形と考えられる。深さ70cmで、底面はほぼ平ら。断面は袋状である。

埋積土は暗褐色土が主体で、底面近くには上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物

遺物はカワラケ、内耳土鍋の破片が4点出土したが、図示し得なかった。

23号土坑

遺構（第13図、図版5）

D－4グリットに位置し、調査区の北東端にある。SK3・8と重複し、SK3を切り、SK8に切られる。規模は上面60cm以上で、平面は楕円形か。深さ38cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形である。

埋積土は褐色土が主体で、下層には上層より多くのローム粒子や同ブロックを含む。

遺物（第16図、第3表、図版11）

遺物はカワラケ、陶器の甕（常滑系）の破片が10数点出土した。
1・2はカワラケで、2は底部糸切り。3は常滑系の底部で、外面に砂粒付着。

24号土坑

遺構（第15図、図版7）

D−3グリットに位置し、調査区中央の北端にあり、SK6の西側にある。規模は上面径が100×64cm、下面径が80×50cmで、平面は隅丸長方形。深さ103cmで、底面はほぼ平ら。断面は西壁が袋状、東壁などは外傾する。主軸方位はN−87°−Wである。

埋積土は黒褐色土が主体で、底面近くに薄く黒色土がみられた。

遺物（第16図、第3表）

遺物はカワラケの破片が4点出土した。

1はカワラケで、ロクロ整形。

25号土坑

遺構（第15図、図版7）

C−4グリットに位置し、調査区中央の東寄りにある。SK4・P26・66と重複し、SK4に切られる。規模は上面径が106×52cm、下面径が68×45cmで、平面は隅丸長方形である。深さ62cmで、底面はほぼ平ら。断面は逆台形で、主軸方位はN−61°−Eである。

埋積土は黒褐色土が主体である。

遺物（第16図、第3表、図版10）

出土遺物はカワラケ（完形）1点とカワラケの破片2点が出土した。

1はカワラケで、底部糸切り後ナデ整形。時期は6期と考えられる。

6．西館堀

遺構（第9図、図版3）

A−3・B−3・C−2・C−3・D−2・D−3グリットにまたがって位置し、調査区中央を斜めに南北に延び、北側と南側は調査区外に延びている。SD3〜6、SK17・26と重複し、これらを切る。確認長は直線で12m、この部分の想定図の上面は幅50m弱とされ、その東側側面の一部のみを確認するにとどめた。断面は調査区の北壁から、開口部からなだらかに2m程下方に延び、急傾斜面を40cmつくり、30cm程テラスを持ってまた急傾斜面がみられる形である。主軸方位はN−17°−Wである。

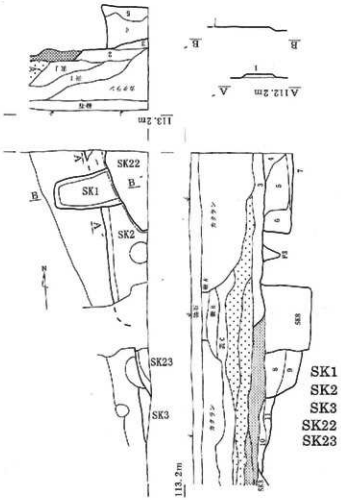
埋積土は上、中、下層に大別され、上層は堀自体が昭和まで開口していたため、この時代に埋め戻された土砂が堆積し、中層は2号整地層、下層は黒褐色土が主体で、全体に東側より土砂が流れ込んだ形である。

遺物（第18図、第3・4表、図版10〜12）

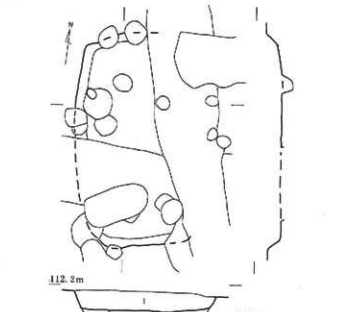
遺物はカワラケ、内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）や瓶・皿（瀬戸・美濃系）、古代の瓦などの破片が60数点と砥石2点、金属製品1点が出土した。

1〜7はカワラケで、3は体部外面に墨書がみられる。5・7は底部に板目状圧痕がみられる。3・8は内面、5・7は内外面にカーボンがみられ、灯明皿と考えられる。時期は1・2が6〜7期。8は内耳土鍋で、内面くびれ部に沈線がみられる。9・10は瀬戸・美濃系の灰釉で、9は花瓶、10は皿である。時期は9は大窯Ⅰ期、10は施Ⅳ−大窯Ⅰ期。

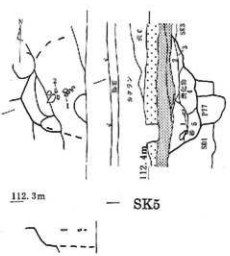
13・14は砥石でともに研面4面の凝灰岩製。15は金銅製の飾り金具で、ナナ子（魚子）文を地文とし、ハート型の透かし孔がある。



SK1　1黒色土(10YR2/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3~10mm）を20%含む。
SK2　2暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~20mm）を20%、炭化物粒（3~5mm）を3%含む。
3暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~10mm）を20%、炭化物粒（3~5mm）を5%含む。
SK22　4暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~40mm）を30%含む。
5にぶい黄褐色(10YR5/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~30mm）を30%含む。
6にぶい黄褐色土(10YR5/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~30mm）を30%含む
7暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、径~40mmを40%含む。
SK23　8暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~30mm）を30%、炭化物粒（3~5mm）を3%含む。
9にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~10mm）が50%以上占める。
SK3　10にぶい黄褐色(10YR5/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~30mm）を30%含む。
11にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~20mm）を30%含む。



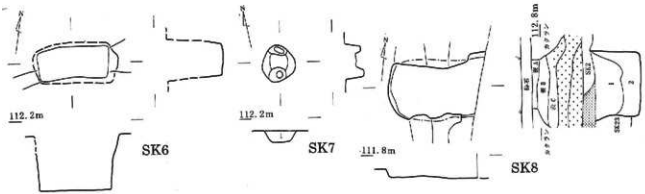
SK4
1暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~50mm）を30%、炭化物粒（3~10mm）を3%含む。



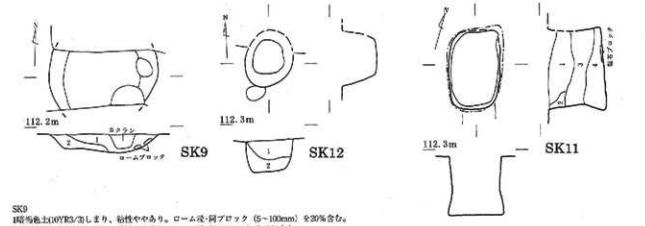
SK5
1にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、炭化物粒（3~10mm）を30%、砂、石英粒粒子を少量含む。
2にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり、粘性ややあり。ローム粒（3~10mm）を30%、砂を少量含む。
3灰黄褐色土(10YR4/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒（3~20mm）を30%含む。
4灰黄褐色土(10YR4/2)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、炭化物粒（3~40mm）を30%含む。
5にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり、粘性ややあり。ローム粒、粘土粒（3~10mm）を25%、砂を少量含む。

0　2m

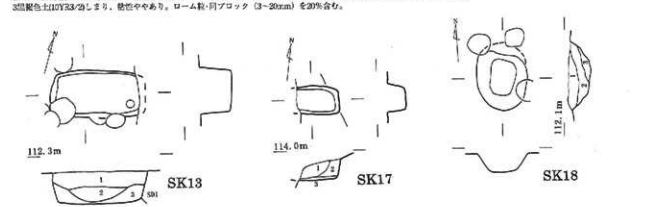
第13図　SK1~5・22・23平・断面図



SK7
1黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～50mm）を30%含む。
SK8
1暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を30%、炭化物粒（3～5mm）を3%含む。
2暗褐色土(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を40%含む。

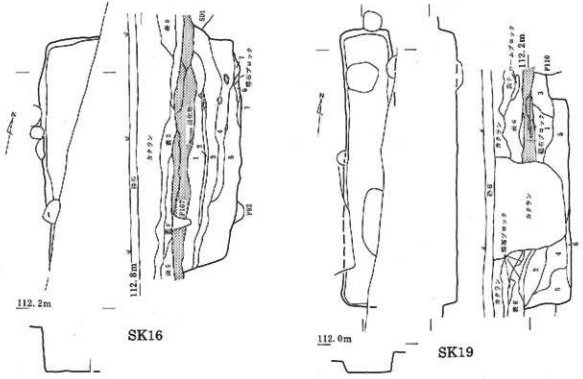


SK9
1暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（5～100mm）を20%含む。
2暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒（5～20mm）を15%含む。
SK11
1黒褐色土(10YR2/2)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、（3～20mm）を30%、炭化物粒（3～10mm）を5%含む。
2黒褐色土(10YR2/2)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒（3～5mm）を25%含む。
3黒褐色土(10YR2/2)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、(3～20mm）を30%含む。
4黒色土(10YR1.7/1)しまりなし、粘性ややあり。軽石粒・同ブロック、（3～10mm）を5%含む。
SK12
1暗褐色土(10YR3/3)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～20mm）を30%含む。
2暗褐色土(10YR3/3)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～50mm）を30%含む。
SK13
1にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を10%、炭化物粒（5～10mm）を3%含む。
2にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を30%、炭化物粒（5～10mm）を3%含む。
3黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～20mm）を20%含む。



SK17
1黒褐色土(10YR3/1)ややしまりややあり、粘性あり。軽石粒（3～5mm）を10%含む。
2黒褐色土(10YR3/1)しまりややあり、粘性あり。ローム粒、軽石粒（3～10mm）を20%含む。
3黒色土(10YR1.7/1)しまりなし、粘性あり。
SK18
1黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～20mm）を20%含む。
2黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を30%含む。
3褐色土(10YR4/6)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～50mm）が大半（50%以上）を占める。

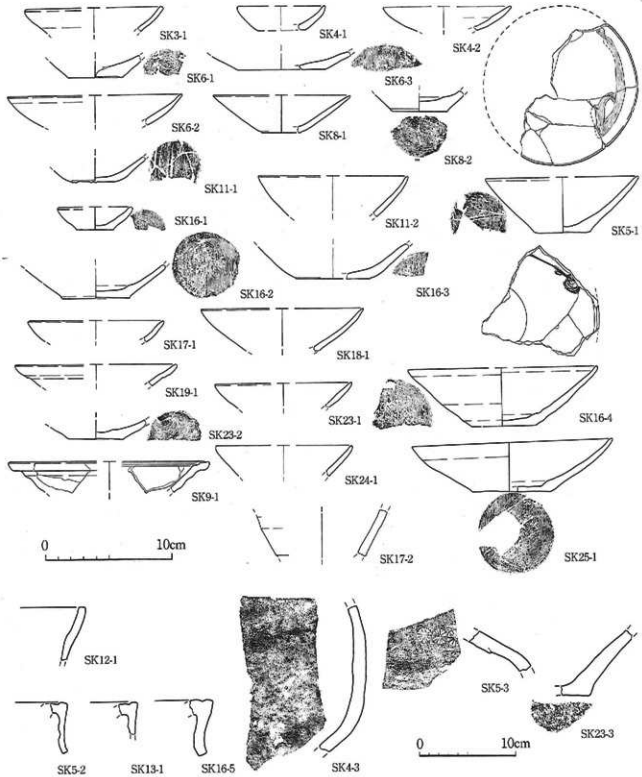
第14図　SK6～9・11～13・17・18平・断面図



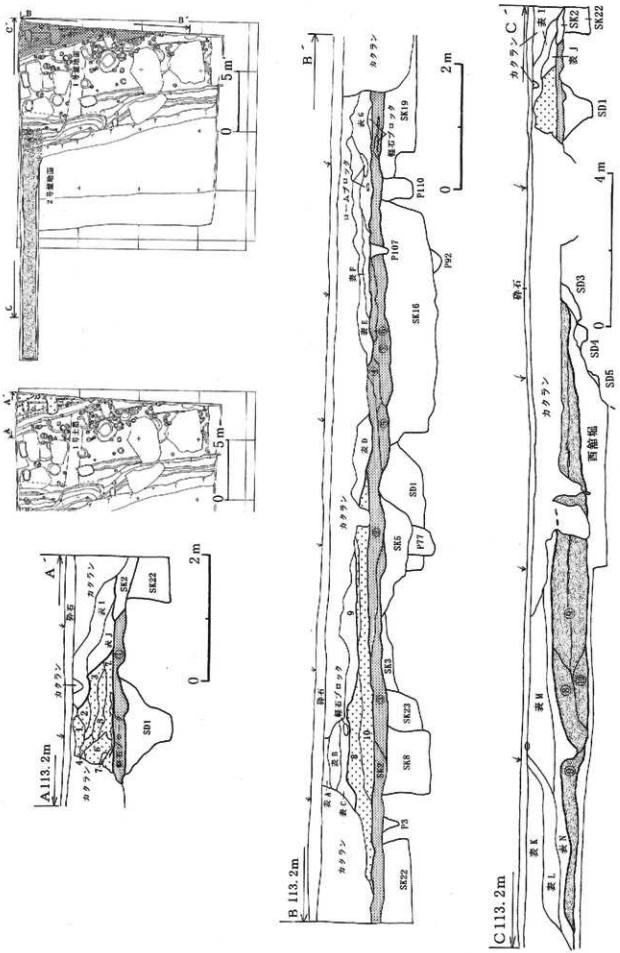
SK16
1K黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒、炭化物粒（3～30mm）を40%含む。
2K黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、炭化物粒（3～50mm）を30%含む。
3にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒、粘土粒、炭化物粒（3～10mm）を30%含む。
4暗褐色土(10YR3/2)しまりなし、粘性なし。ローム粒・同ブロック、炭化物粒（3～20mm）を40%含む。
5にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒・同ブロック（3～50mm）を40%含む。
6暗褐色土(10YR3/2)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒・同ブロック（3～50mm）を40%含む。
7黄褐色土(10YR5/6)しまりなし、粘性あり。ローム土が大半（50%以上）を占める。
SK19
1褐色土(10YR4/4)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、礫石粒・同ブロック、炭化物粒（3～50mm）を30%含む。
2褐色土(10YR4/4)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、焼土粒、炭化物粒（3～10mm）を20%含む。
3K黄褐色土(10YR4/2)しまあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、焼土粒、炭化物粒（3～10mm）を30%含む。
4褐色土(10YR4/4)しまあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、炭化物粒（3～20mm）を30%含む。
5褐色土(10YR4/4)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・粒ブロック、炭化物粒（3～40mm）を40%含む。
6K黄褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～10mm）を20%含む。

SK24
1黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒（5～10mm）を30%含む。
2黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（5～150mm）を30%含む。
3黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（5～20mm）を40%含む。
4にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまりなし、粘性あり。ローム土が大半（50%以上）を占める。
5黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を30%含む。
6黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～30mm）を30%含む。
7K色土(10YR1.7/1)しまりなし、粘性ややあり。
SK25
1黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3～60mm）を20%含む。
2K黄褐色土(10YR5/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒（5～10mm）を5%含む。
3K黄褐色土(10YR5/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒（5～10mm）を10%含む。
4にぶい黄褐色土(10YR5/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒（5～10mm）を10%含む。
5暗褐色土(10YR3/4)しまり、粘性ややあり。

第15図　SK16・19・24・25平・断面図


SK3-1
SK4-1
SK4-2
SK6-1
SK6-3
SK6-2
SK8-1
SK8-2
SK11-1
SK16-1
SK11-2
SK5-1
SK16-2
SK16-3
SK17-1
SK18-1
SK19-1
SK23-1
SK16-4
SK23-2
SK24-1
SK9-1
0
10cm
SK17-2
SK25-1
SK12-1
SK5-3
SK23-3
0
10cm
SK5-2
SK13-1
SK16-5
SK4-3

第16図　SK出土遺物



第17図　1号土墓、1·2号整地面平·断面図

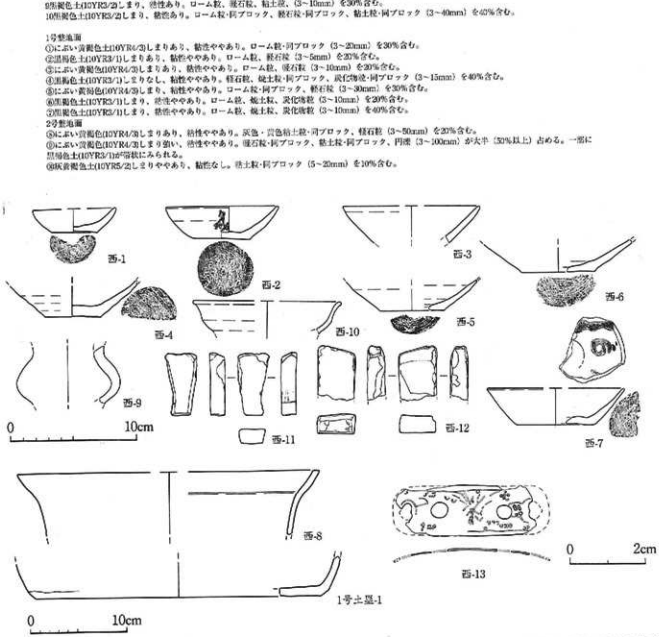
第17図1号土墨、1・2号整地面土層

表土層
A褐灰色土(10YR4/1)しまり、粘性ややあり。粘土粒・同ブロック（5~20mm）を5%含む。
Bにぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、硬石粒、(3~30mm）を15%、炭化微粒（3~10mm）を3%含む。
Cにぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、硬石粒・同ブロック（3~30mm）を20%含む。
Dにぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、粘土粒（3~10mm）を20%含む。
E黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、硬石粒（3~5mm）を20%含む。
F褐灰色土(10YR4/1)ややしまり、粘性なし。軽石粒・同ブロック（3~30mm）を20%含む（一部滞状）。
G黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3~5mm）を20%含む。
H灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒（3~10mm）を10%含む。
Iにぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒（3~30mm）を15%、炭化微粒（3~10mm）を3%含む。
Jにぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、硬石粒・同ブロック（3~30mm）を20%含む。
K黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性ややあり。灰色粘土粒・同ブロック（5~20mm）を15%含む。
L黒褐色土(10YR3/2)しまりあり、粘性あり。灰色粘土粒・同ブロック（5~50mm）を50%含む。
M褐色土(10YR4/6)しまりあり、粘性ややなし。灰色粘土粒・同ブロック（5~20mm）を10%含む。
N黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性なし。軽石粒・同ブロック、円礫（3~20mm）を20%含む。

1号土墨
1にぶい黄褐色土(10YR5/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3~20mm）を20%含む。
2黒褐色土(10YR3/1)しまりややあり、粘性なし。ローム粒、硬石粒、粘土粒、（3~10mm）を10%含む。
3褐色土(10YR4/6)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、粘土粒、（3~10mm）を30%含む。
4褐色土(10YR4/6)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3~30mm）を30%含む。
5黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒・同ブロック、粘土粒（3~10mm）を15%含む。2層を焼でいる。
6明黄褐色土(10YR6/6)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3~40mm）が大半（50%以上）を占める。
7黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒、粘土粒（3~10mm）を15%含む。
8黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性あり。ローム粒、硬石粒、粘土粒・同ブロック（3~40mm）を50%含む
9黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性あり。ローム粒、硬石粒、粘土粒、（3~10mm）を30%含む。
10黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性あり。ローム粒・同ブロック、軽石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック（3~40mm）を40%含む。

1号整地面
①にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック（3~20mm）を30%含む。
②黒褐色土(10YR3/1)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、軽石粒（3~5mm）を20%含む。
③にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。ローム粒、硬石粒（3~10mm）を20%含む。
④黒褐色土(10YR3/1)しまりなし、粘性ややあり。軽石粒、砂土粒・同ブロック、炭化微粒・同ブロック（3~15mm）を40%含む。
⑤にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり、粘性ややあり。ローム粒・同ブロック、軽石粒（3~30mm）を30%含む。
⑥黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、砂土粒、炭化微粒（3~10mm）を20%含む。
⑦黒褐色土(10YR3/1)しまり、粘性ややあり。ローム粒、砂土粒、炭化微粒（3~10mm）を40%含む。

2号整地面
⑧にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり。灰色・黄色粘土粒・同ブロック、軽石粒（3~50mm）を20%含む。
⑨にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり弱い、粘性ややあり。硬石粒・同ブロック、粘土粒・同ブロック、円礫（3~100mm）が大半（50%以上）占める。一部に焼土粒(10YR3/1)が帯状にみられる。
⑩灰黄褐色土(10YR5/2)しまりややあり、粘性なし。粘土粒・同ブロック（5~20mm）を10%含む。



第18図　西館堀・1号土墨出土遺物

7.土墨

1号土墨

遺構（第17図、図版7）

D−4グリットに位置し、平面で確認することはできなかったが、調査区北壁と東壁に断面が確認された。この2か所の盛土が調査区北東端を斜めに南北に延び、北側と南側は調査区外に延びている。規模は現状で北壁の基底部は約2m、東壁の基底部は4m以上である。

盛土は黒色土と地山の黄褐色土（ロームや軽石、粘土の粒子やブロック）がみられた。北壁の西側は黒色土やローム・軽石土がブロック状に盛土され、東側は水平に盛土されていた。東壁では全体に黒色土中にロームや軽石、粘土のブロックが混入したものが水平に盛土されていた。

遺物（第18図、第3表、図版10）

遺物は内耳土鍋、陶器の甕（常滑系）の破片が数点出土した。

1は内耳土鍋の底部で、外面は砂粒が付着。

8. 整地面

1号整地面

遺構（第17図、図版7）

本跡は調査区北壁の東寄りの一部と東壁のほぼ全面にみられ、南壁は撹乱で不明であるが、A−4・B−4・C−4・D−4グリットに位置していたと推察される。この整地面にSK2やP107が掘り込まれ、その上に1号土墨が構築されている。土墨との位置関係から、西館堀の内側の土墨を作るための整地面と考えられる。

整地層の盛土は黒褐色土が主体で、ロームの粒子や同ブロックが混入していた。

遺物

遺物はカワラケの細片が1点出土したが、図示し得なかった。

2号整地面

遺構（第17図、図版7）

本跡は調査区内の西館堀を埋め立てるような形で北壁の断面にみられ、調査区西側に延びていた。その範囲は西館堀全体に広がっていたかは撹乱が多かったため不明である。しかし、西側の延びをトレンチによって確認した結果、調査区東端から約24mまではほぼ水平に盛土され、徐々に下がっていった。

整地層の盛土は黄褐色土の中にロームや軽石の粒子や同ブロックが混入しており、少量の礫もみられ、一部に黒褐色土が水平に堆積していた。

遺物

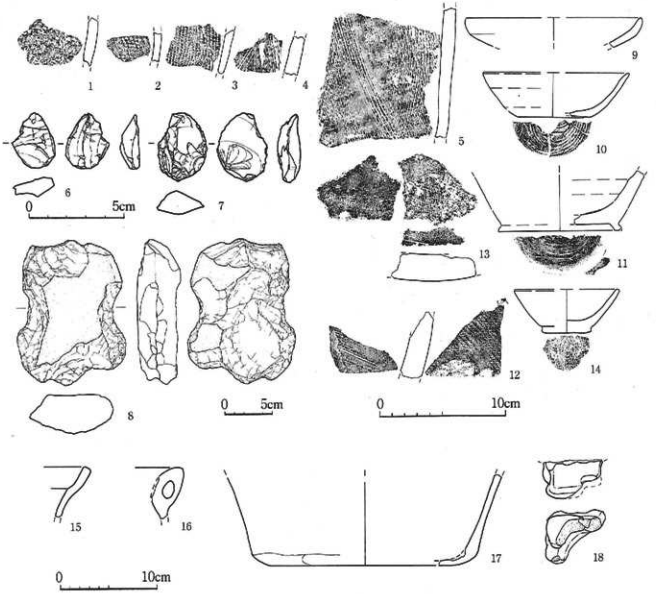
遺物は出土しなかった。

9. 調査区内出土遺物（第19図、第5·6表、図版10·13）

調査区の遺構に伴わない、もしくは試掘調査等により出土した遺物を一括して図示した。

1·3·5～7はSD1、2はSK11、4はP8b、8はSD5、9はSK16、11はSD4、12はP12、13は西館堀、14はTr5、15·16はC－3グリット、17はTr3、18は西館堀拡張部。

1から5は縄文土器で、1は弧状の押引文がみられる。阿玉台Ⅲ·Ⅳ式と考えられる。2·3は無節の縄文で、中期のものか。4·5は条線がみられ、同一個体と考えられる。称名寺式と考えられる。6·7は剥片で、共に調整痕がみられ、高原山系の黒曜石と考えられる。8は打製石斧で、抉りの浅い分銅型で、2面に自然面を残す。9·10は土師器の坏で、9は7世紀後葉、10は10世紀代と考えられる。11·12は須恵器で、11は高台付の壺底部で、内面に自然釉がみられる。12は外面に平行文タタキ目のみられる甕の体部片。13は古代の女瓦で、凹面に布目痕みられる。水道山瓦窯産か。14はカワラケで、時期は6～7期。15～17は内耳土鍋で、外面にカーボン付着し、17の底部外面に砂粒付着。18は角形火鉢の脚部で、4脚一対であったと考えられる。



第19図　調査区内出土遺物

Ⅲ　まとめ

以上のように今回の調査では縄文時代から近世にかけての遺構や遺物が確認された。このなかで、主体となるのは大きく分けて近世宇都宮城の西館堀とその前身の中世宇都宮城関連の遺構があげられる。これらについて時代ごとに総括し、まとめとする。

中世

今回の調査区では、一部14世紀代まで遡ると思われる遺構も見られたが、掘立柱建物跡や溝跡・井戸跡・土坑などの遺構は出土遺物からほぼ15～16世紀代で、江戸期の直前がのものが大半を占める。溝跡は南北に走り、SD3～6は重複している。この溝跡の内（東）側に沿って掘立柱建物跡が建てられており、その規模などは明確にできなかったが、規則性が感じられる。大小の井戸跡はほぼ等間隔で見られたが、断面形の違いから時期の違いがあったと考えられる。また、小型の方形土坑の長軸方位は東西、大型の方形土坑は南北方向を向いており、小型の方形土坑のSK25では底面近くにカワラケがみられ、埋積土も人為的に埋め戻されているなど、貯蔵穴以外の性格のものとも考えられる。逆に大型方形土坑のSK16では炭化米などが確認されていることから、貯蔵穴の可能性も考えられる。以上のことから、調査区中央を南北に延びる溝に区画された中に建物や井戸、貯蔵穴などが配置された区域であったと考えられる。

出土遺物は、カワラケ・内耳土鍋などの土器類を主体とし、常滑系の陶器甕・捏鉢類がこれに次ぐ。土器類は15～16世紀代のものを中心とするが、常滑系の甕類は14～16世紀と年代幅をもつ。また、在地産の瓦質の火鉢や瀬戸・美濃系の陶器皿・碗、瓶類も見られ、陶器類はいずれも灰釉を施したもので、おおむね15世紀代に属する。金属製品としては、後述の懸仏の他、家具類の飾金具と思われる金銅製品などが出土し、石製品としてはこれも後述の硯の他、砥石、茶臼などが極少量出土した。

尚、掘立柱建物跡（SB1）の柱掘方内に埋納された懸仏、井戸跡（SE1）より出土した特異な形態の硯や細かな文様を施した瓦質の火鉢などの存在などから、有力な階層の人々の存在が推察される。しかし、昨今「威信財」との用語で表現される大形の舶載陶磁器の出土が無く、疑問を残すところである。

遺物として特筆されるものとして、懸仏や硯があげられる。管見によれば中世の懸仏は県内で以下の2か所で出土例がみられるのみである。

（1）日光市男体山山頂遺跡　男体山山頂部より出土（千手観音・阿弥陀如来像など6点）。

（2）佐野市幄城塚遺跡　地下式坑より他の銅製品の破片とともに出土（如来像１点）。

これらの懸仏を比較すると、本跡のものは銅板に釘状の工具で裏面から打ち出している。これに対し、他の懸仏は像を浮き出させたものや像を別に造り取り付けられているなど、本跡の懸仏の方が稚拙な造りである。また、出土状況も男体山では山岳信仰関連によるもの、幄城塚遺跡は廃棄された状況、本跡は柱穴に埋納された状態など様々であった。

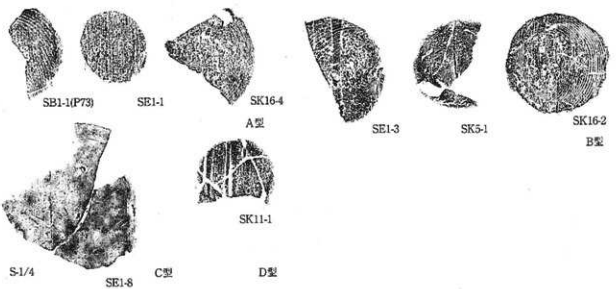
城郭跡などの掘立柱建物跡の柱堀方内より古銭等の金属が出土する例は多数みられ、1棟で複数の柱穴より出土するものもある。いずれも地鎮の目的で埋納されたと理解されている。しかし、「御正体」とも呼ばれ、本来御本尊として信仰の中心に据えられるべき懸仏が２点（破片を含む）も柱穴に納められ、しかもその１点は折り曲げられていた。懸仏は主に天台密教＝修験道との関連が深く、日光山との関係が想起される。この埋納された建物が特別な存在であったのか？、戦国末期という時代

がそうさせたのか？。また、単に鋳造物であれば何でもよかったのか？、埋納されていた建物の性格を考える上でも興味深い。

井戸跡（SE1）から廃棄された状況で出土した硯は、その色調や質感などから奥州産の紫雲石硯に類似している。小片で全容は知り得ないが、形態は周囲に自然面を残し、曲線的な角度の異なる複数の突起を表した特異な硯の一部（海部）にあたる。県下の下古館遺跡などの中世遺跡では方形硯の出土例は知られるが、本跡のような形態のものは出土例が見られない。中国産の蟬形硯を模して作成したものと推考するが、類例の出土を期待したい。

また、出土土器類の底部外面に色々な板目状圧痕がみられ、これらに注目してみた。カワラケ・内耳土鍋・火鉢では第20図のような板目状圧痕がみられた。これらの板目は、土器が整形・乾燥させる時に板に押し付けられる行為（内面のナデ整形などによる押圧）の為に付いた板目と考えられる。これらを4種類に分類してみた。

A型は板目の凸部に押し付けたため、凸部の板目が底部に付いたものと考えられる。B型は板が裂けているところに底部を押し付けたためその裂けた部分に粘土が入り込んで凸面が線状にできたものと考えられる。C型は板目凸部と凹部があるところに底部を押し付けたものと考えられ、凹凸部がみられる。以上のA～Cは自然の板目に底部を押し当てて付いた板目痕と考えられる。これに対しD型は板に溝を刻んだ上に底部を押し付けたものと考えられ、板（手板）に意図的に溝を彫ったものか、溝が彫られた手板以外のものを再利用したものと考えられる。



第20図　分類別板目状圧痕

近世

調査区は近世には西館の西縁、西館堀の内側立ち上がり部分にあたり、調査の結果、堀と1号土塁や1号整地面と西館堀を埋める近世以降の2号整地面などの施設がみられた。ここでは西館堀の成立について述べ、近世のまとめとしたい。

宇都宮城跡の700～800年に及ぶ長い歴史の中で、今次調査の対象となった西館堀の開削時期を検討する上で、各種の城下絵図が参考となった。殊に、平成18年10月に栃木県立博物館で開催された企画

展『名城　宇都宮城ーしろとまちの移り変わり』において詳細な検討のもとに多数の絵図が展示され、その成果は展示図録に収録されている。したがって本項は全面的にこの展示図録の恩恵に浴したものであることを明記するとともに、理解の誤り等があればすべて筆者の責に帰すものである。

前述の如く、宇都宮城は中世北関東の雄宇都宮氏の本拠地として、宇都宮氏の始祖と云われる宗円が康平年間（1058～65）に築いた、あるいは藤原秀郷が天慶3年（940）に築いたとも云われるがともに確証は無い。

史料の上で宇都宮氏が登場するのは、『吾妻鏡』に元暦元年（1184）5月24日に3代当主の宇都宮朝綱が、源頼朝より宇都宮社務職を安堵されたことが記されている。

また、近年の史跡整備に伴う本丸周辺の発掘調査の成果によって、13世紀前半頃までは宇都宮館跡の存在を推察し得るとのことである。その後、徐々に改修されて防御性を増し、戦国期には本格的な城郭になったと推考する。残念ながらこれらの時期の絵図等は確認されておらず詳細は発掘調査を待たなければならない。

尚、城内の各施設の名称については、本丸、二の丸、三の丸等の主要な郭や、三日月堀、百間堀などの堀、大手門、太鼓門、二の丸門、清水門、伊賀門、西館門、南館門、地蔵堂門などと絵図に記載の見られるものもある。また、三日月堀のようにその形状から付与された名称や本丸～三の丸のような主要郭は名称の記載が無くとも取り違えることは無いと思われる。しかし、第21図1の「百間堀」が現在我々が呼称する三の丸西側の「百間堀」と同一のものか、第21図4では現在我々が「西館堀」と呼ぶ堀の脇に「百間ホリ」との記載がある。また、時代は著しく下がるが、大正15年刊行の「栃木県宇都宮市全図」では、「百間堀」の南に「西館堀」、その南の現在「南館堀」と呼んでいる部分に「地蔵堀」と記載されており、これ以降の刊行物でもこの名称が継承されている。いずれにせよ、当時の名称が判明せず使用出来ない施設も多く、説明にあたっては第4図に示した「江戸時代宇都宮城下復元図」に記された名称を使用することとした。宇都宮市教育委員会が刊行した『宇都宮文化財マップーA市中心部地区』に掲載されたもので、一般に普及した名称と判断した。

現在知られている城下絵図で最も古いと考えられているのは、第21図1に部分模式図を示した『野州宇都宮之城図』（原典・前田育徳会尊経閣文庫蔵）で、街道の整備状況から本多正純（藩主在任1619～1622）以降と推定されている。三の丸が北側のみで西に延びていないが、西側に「百間堀」と記された細い堀が表現され、その南寄りの西館堀に相当する部分まで延びている。さらに西外郭の堀や大手門の記載が見られない。尚、西側の「百間堀」は現在呼ばれる三の丸西側の「百間堀」では無く、後の外郭の堀と見る向きもある。

次に第21図2に部分模式図を示した、第2次奥平氏時代の慶安3年（1650）頃と推定される『下野宇都宮図』（原典・栃木県立博物館蔵）では、外郭を含めほぼ後世の宇都宮城の構えを整えている。しかし、三の丸南部の「西館堀」と外郭南西部の「地蔵堀」部分は後世の堀と同形で範囲が示されているものの、「堤」と表記され堀を示す青の彩色が無い。堤とはどの様な状況か判断し難いところであるが、虎口部分の細部に至るまで後世の堀の形状と合致することから、開削直前の状況と推察される。また、外郭西側は空堀の為、次の第21図3は赤で彩色されているが、本図は水堀と同じ青色であり、他の絵図でも水堀と同じ青で彩色されたものもあるなど疑問を残す。

次の第21図3に部分模式図を示した寛文3年（1663）の『下野宇都宮城図』の元録11年（1693）書写（原典・前田育徳会尊経閣文庫蔵）によれば、「西館堀」、「地蔵堀」ともに堀を示す青の彩色がなされている。この間に開削が完了したと判断される。西側外郭の空堀は赤で彩色されている。

第21図　城下絵図

最後の第21図4に部分模式図を示した慶応年間（1865～1868）の『宇都宮御城内外絵図』（原典・宇都宮市教育委員会蔵）では、西側外郭は空堀が赤で彩色され、南西隅の地蔵堂門の西側部分及び南側の外郭部にも同様の空堀が示される。また、各所の門の名称が記されている。二の丸の北に「二の丸門」、南が「二の丸裏門」とあり、南舘門の内側を「南舘」、西舘門の内側を「西舘」と呼称することは矛盾しないと考える。

以上のように、城下の整備に伴う街道の付替えや、城の普請などは第1次本多時代にも行われたが、外郭を含めた城郭の整備は第2次奥平時代に行なわれたことが判る。尚、これを補足する史料として奥平家の家譜『御家譜編年叢林　下　巻之五』（中津市立小幡記念図書館蔵）によれば、「奥平美作守（忠昌）が宇都宮城二ノ丸東方に石垣を築くこと、三ノ丸の大手堀を広げること、西方に新たに堀を設けること」等を幕府に願い出て、寛永8年（1631）7月に許されている。絵図の比較からこの後、徐々に普請が行われ、約30年後の寛文3年頃に完成したと推察される。

この西舘堀に囲まれた郭「西舘」は17世紀代には家臣の屋敷地として利用されていたが、その後は、「材木蔵・小物細工所」、「普請小屋」などとして利用されたことが知られる。

尚、前章で記したように、調査区北端での土層観察から、17世紀中頃に開削された「西舘堀」の内側が部分的に埋め戻されたと判断される。その時期については、戊辰戦争の落城前後、明治の廃城後などの意見もあるが、整地の状況が丁寧であること、堀がある程度埋没していることなどから、城の存続中の末期を想定したい。西舘堀の本格的な埋め戻しは、昭和28年に北半部が、同36年に南半分の埋め戻しが行われた。

引用参考文献

五島美術館　1977「中国の名硯」大塚工藝社

宇都宮市史編さん委員会　1980『宇都宮市史　第二巻　中世史料編』

宇都宮市史編さん委員会　1981『宇都宮市史　第三巻　中世通史編』

宇都宮市　1984『うつのみやの歴史』

岡崎譲治　1982「仏教大辞典」鎌倉新書

木村礎他編　1989『藩史大辞典　第二巻　関東編』雄山閣

斎藤忠　1963『日光男体山山頂遺跡報告』角川書店

佐野市教育委員会・技研測量設計株式会社　2007『烏城塚遺跡現地説明会資料』佐野市教育委員会

田代隆　1995『下古舘遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集　栃木県教育委員会

藤田定興　1979「薄銅板形懸仏について」『福島考古』20号　福島考古学会

松本明夫　2001「資料紹介　栃木県立博物館蔵　下野国宇津宮図」『栃木県立博物館研究紀要』人文－第18号　栃木県立博物館

松本明夫・石川誠　2006『名城　宇都宮城－しろとまちの移り変わり－』栃木県立博物館

横崎彰一・井上喜久男　1976「美濃の古陶」完林社出版

水野和雄　1985「日本石硯考－出土品を中心として」『考古学雑誌』第70巻第4号　日本考古学会

第2表　小穴計測表

番号	グリット	口径 cm	形状	深さ cm	重複関係	出土遺物 その他
1	D-4	28×24	方形	37		カワラケ,要(雲母系)片各1点,SB1
2	D-4	30×30	円形	26	<SD1	須恵片1点,SB4
3	D-4	32	(楕円形)	54	<SK2	SB2
4a	D-4	46×40	楕円形	77	<P4b	
4b	D-4	44×38	円形	82	>P4a	
5a	D-3	(41)×38	円形	16	P5a	内耳土鍋片2点
5b	D-3·D-4	36×26	楕円形	42	P5b	土師器片1点
6	D-3	24×23	楕円形	54		
7a	D-4	38×31	円形	46	SK4,P7b	カワラケ片1点
7b	D-4	(26)×26	(円形)	27	SK4,P7a	
8a	D-4	(30)×28	楕円形	32	P8b	
8b	D-4	25×24	楕円形	16	P8a	縄文土器片1点
9	D-3	26×24	楕円形	18		カワラケ片1点
10	D-3	28×22	楕円形	23		
11	D-3	34×29	楕円形	45		
12	D-3	34×25	楕円形	20	SD3	カワラケ片3点,頁岩砥石片1点
13	C-4	28×22	円形	22	P67·84	
14	C-4	30×28	円形	57		カワラケ片2点
15	C-4	18×14	楕円形	11		
16	C-4	28×26	円形	25	P18	
17	C-4	30×28	円形	13		
18	C-4	36×30	楕円形	30	P16,83	内耳土鍋片1点
19	C-4	33	(円形)	65	P20~81·94·95	カワラケ片2点,内耳土鍋片2点,SB2
20	C-4	–	(円形)	14	P26·94	カワラケ片3点
21	C-4	25×25	円形	5		カワラケ片4点
22	C-3	38×37	円形	52	P23	
23	C-3	20×16	楕円形	10	P22	
24	C-4	28×24	楕円形	28		
25	C-4	40×33	楕円形	18	SB2	
26	C-4	(42)×32	楕円形	31	SK25,P20·94	
27	C-3	(40)×38	(円形)	17	SB2	カワラケ片4点
28	C-3	24×24	円形	54		
29	C-3	46×44	円形	37		
30	C-3·4	30×26	楕円形	34		
31	C-3	20×14	楕円形	6	SD2	
32	C-4	40×33	楕円形	16		
33	C-4	42×36	楕円形	56	P88	カワラケ片1点
34	欠番					
35	B-4	28×28	円形	28	P93	
36	B-4	29×28	円形	18	SK19	
37	B-4	51×48	円形	36	SK19	
38	B-4	(30)×28	円形	21	P39	
39	B-4	28×28	円形	17	P38	
40	B-4	36×26	楕円形	9		
41	B-4	36×34	円形	12	P112	
42	B-4	28×26	円形	25		
43	A-4	(40)×38	円形	55		カワラケ片1点
44	A-4	22×20	円形	21		カワラケ片1点
45	A-4	(42)×33	楕円形	39		
46	A-4	34×20	楕円形	30		カワラケ片1点
47	A-4	(46)×42	円形	14		
48	A-4	(33)×25	楕円形	4	SB4	
49	A-4	(50)×46	円形	33		
50	A-3	45	(円形)	10		
51	A-3	46	(円形)	24		
52	D-4	(20)×18	(円形)	19	SD1	
53	D-4	22×20	円形	24	SD1	
54a	D-4	20×15	楕円形	5	<SK4,<P54b	
54b	D-4	32×28	円形	11	<SK4,>P54a	整石2点,SB1
55	D-4	36×(34)	円形	15	SK4,P54b	SB2
56	D-4	24×22	円形	28	<SK4·SD1	
57a	D-4	(34)×30	(円形)	36	<57b,SD1	カワラケ片5点
57b	D-4	38×28	楕円形	61	>57a,SD1	
58	D-4	28×24	楕円形	46	SD1	
59	D-4	38×34	楕円形	19	SK4,SD1	SB3
60	D-4	48	(円形)	48	SK4,23	SB1
61	D-4	36×34	楕円形	35	SK4	
62	D-3	32×28	楕円形	32	SK9	
63	D-3	54	(円形)	37	SK9	
64	D-4	20×18	円形	5		
65a	C-4	40×28	楕円形	46	SK4·5,SD1,P65b	
65b	C-4	28	(円形)	7	SK4,P65a	
66	C-4	26	(円形)	18	SK4·25	
67	C-4	40×49	円形	44	SK13,P13·100	カワラケ片11点,要片(雲母系)2点,土師器片3点
68	C-4	(36)×30	(楕円形)	45	SE2,P72·73	カワラケ片3点
69	C-4	38	(楕円形)	6	SK13,P76	カワラケ片,要片(雲母系)各1点
70	C-4	22×(18)	方形	21	P72	
71	C-4	20×(20)	(円形)	19	P72	
72	C-4	(50)	(楕円形)	53	>P73,SE2,P68·70	
73	C-4	48×46	楕円形	70	>P72,P68·71·97	カワラケ片21点,要片(雲母系)1点,SB1
74	C-4	(24)	(円形)	16	SE2	

番号	グリット	口径 cm	形状	深さ cm	重複関係	出土遺物 その他
75	C-4	(28)×22	(円形)	38	SE2	SB3
76	C-4	(30)	(楕円形)	52	SK13,P69	カワラケ片2点
77	C-4	(30)	(楕円形)	13	SD1	SB1
78	C-4	28	(楕円形)	40	SK8,SD1	
79	C-4	(30)×22	(楕円形)	51	SK4,P19-81	
80	C-4	30	(円形)	35	SE2,P19-95	
81	C-4	28	(楕円形)	23	P18-19-79-95	
82	C-3	30×22	楕円形	22	SK12	
83	C-3	16×14	円形	7		
84	C-4	46×36	楕円形	42	P13-67-85-100	
85	C-4	38×34	円形	32	P84	
86	C-4	(20)	(円形)	33	P87-89	カワラケ片5点,内耳土器片4点
87	C-4	(60)	(円形)	42	P86-89	
88	C-4	(32×24)	(楕円形)	12	P33	SB3
89	C-4	48×30	楕円形	58	P86-87	
90	欠番					
91a	B-4	36×26	円形	37	P91b	
91b	B-4	(28)×20	楕円形	25	SK16,P91a	
92	B-4	(40)	(楕円形)	77	<SK16	カワラケ片6点
93	B-4	(16)	(円形)	14	P33	
94	C-4	(50)×40	(楕円形)	83	P19-20-26	SB1
95	C-4		(円形)	21	SE2,P19-80-81	
96	C-4	20×16	円形	5		
97	C-4	22	(円形)	57	P73	SB2
98	C-3	26×22	楕円形	54		
99	C-4	25	(楕円形)	6	SD1	
100	C-4	(56)	(楕円形)	24	P13-84-101-103	
101	C-4	34×30	楕円形	25	P100	
102	C-4	38×30	楕円形	10	SK16-18	
103	欠番					
104	C-4	22×20	円形	4	SK16	
105	C-4	36	(円形)	48	SK16	
106	C-3	32×20	不整楕円形	14	SD5	
107	B-4	40	(円形)	28	>SK16,1号受珠面	
108	B-4	36×28	楕円形	18	P98	
109	B-4	24×20	円形	18	SK19	カワラケ片1点
110	B-4	(40)	楕円形	29	SK19	
111	B-4	36×30	楕円形	18	SK8	
112	B-4	32×26	楕円形	31	P41	カワラケ片2点
113	D-2	28×28	円形	48	SD5	
114	D-4	(25×20)	楕円形	28	SD1	
115	D-4	32×30	楕円形	48	SK4	
116	D-3	(22)×20	円形	5		
117	D-4	20×20	円形	3	SD1	
118	D-4	28×20	楕円形	40	SD1	SB3
119	D-2	30×22	楕円形	24	SD4	
120	D-2	34×30	楕円形	20	SD4,P121	
121	D-2	36	(楕円形)	10	SD4,P120	
122	C-2-C-3	22×22	円形	10	SD5	

第3表　各遺構出土土器観察表

番号	種別・器種	寸法(cm)	遺存度	胎土・焼成・色調	整形の技法	出土位置・備考
SB1-1(P73)	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (5.4)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	掘建土
SB2-1(P19)	カワラケ	口径 (5.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	柱根土
P9-1	ヵワラケ	口径 (14) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	掘根土
P33-1	ヵワラケ	口径 (10.4) 器高 2.9 底径 (5)	1/3	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	柱根土 6期
P63-1	カワラケ	口径 (9.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	柱根土 内外面カーボン付着
P67-1	カワラケ	口径 (12) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	柱根土 5期
P68-1	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 4.2	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	掘根土
P68-2	ヵワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4.4)	体部から底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	掘建土 5期
P68-3	ヵワラケ	口径 12.5 器高 3 底径 5.5	ほぼ完形	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	柱根土 5期
P78-1	カワラケ	口径 (6.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形	柱根土
SD1-1	カワラケ	口径 (7) 器高 1.9 底径 4	1/2	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り	建設期 6～7期
SD1-2	カワラケ	口径 (12) 器高 3.5 底径 (3.6)	1/4	胎土 砂粒 焼成 良 色調 にぶい黄色	ロクロ整形、底部糸切り	建設期 外面に墨書らしきものあり
SD1-3	瓦質土器 火鉢	口径 - 器高 - 底径 (13)	底部片	胎土 細砂粒 焼成 不良 色調 黒色	外面ナデ整形 内面摩滅激しい、外面板目状圧痕	柱根土
SD1-4	陶器・瓦	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 粗砂粒 焼成 良 色調 褐赤褐色	ナデ整形	掘根土 常滑系　9型式
SD5-1	カワラケ	口径 (8.8) 器高 2.3 底径 (4)	1/2	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り	BISK25掘根土 6～7期
SD5-2	カワラケ	口径 6.3 器高 1.8 底径 4.2	完形	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り後ヘラ架り	掘根土
SD5-3	カワラケ	口径 (12) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	BISK26掘根土 内外面にカーボン付着
SD5-4	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 3.9	体部から底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 灰黄色	ロクロ整形、底部糸切り	BISK26掘根土 内面全体にカーボン付着
SD5-5	カワラケ	口径 (14) 器高 4 底径 3.8	2/3	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り	掘根土
SD5-6	内耳土鍋	口径 (30) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡赤褐色	内外面ナデ整形	底面 外面にカーボン付着
SD5-7	内耳土鍋	口径 (36) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 細砂粒 焼成 良 色調 淡赤褐色	内外面ナデ整形	掘根土 内外面全体にカーボン付着、底部外面に砂付着
SD5-8	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 (25)	底部片	胎土 粗砂粒 焼成 良 色調 淡赤褐色	内外面ナデ整形、底部外周ヘラ削り	掘根土 外面外面全体にカーボン付着、底部外面に砂付着
SD5-9	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 (24)	底部片	胎土 粗砂粒 焼成 良 色調 淡赤褐色	内外面ナデ整形、底部外周ヘラ削り	掘根土 外面外面全体にカーボン付着、底部外面に砂付着
SD5-10	擂鉢	口径 - 器高 - 底径 (13.7)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 にぶい褐灰色	ロクロ整形、外面糸切ヘラ削り	BISK26掘根土
SD5-11	陶器・平茶碗	口径 (13.5) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	ロクロ整形、体部外面下半に強ヘラ削り、目跡あり	BISK26掘根土 内面と外面（口縁から体部上部）に灰釉がみられる。瀬戸・美濃系、施釉期
SD5-12	陶器・椀	口径 - 器高 - 底径 (5.8)	底部に高台片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	ロクロ整形	掘根土 外面に灰釉がみられる。瀬戸・美濃系
SD5-13	陶器・石皿	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	ロクロ整形	掘根土 内外面に灰釉がみられる。瀬戸・美濃系、施釉期
SD5-14	陶器・三足盤	口径 - 器高 - 底径 (10.9)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 黄白色	ロクロ整形、外面横ヘラ架り	BISK26掘根土 瀬戸・美濃系、施釉期

番号	種別・器種	寸法(cm)	遺存度	胎土・焼成・色調	整形の特徴	出土位置・備考
SD6-1	陶器・内耳鍋	口径 9.5 器高 2 底径 5	3/4	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 黄色	ロクロ整形、底部糸切り	瓶潮 口縁部内外に灰釉みられる。備前・美濃系、瓶茶釜
SE1-1	カワラケ	口径 11.5 器高 3.5 底径 3.5	3/4	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り、底部板目状圧痕	瓶潮面 6～7期
SE1-2	カワラケ	口径 (12.5) 器高 2.5 底径 7	口底から底部片	胎土 微砂粒 焼成 やや良 色調 橙色	ロクロ整形、底部外面板目状圧痕	理焼土（最下層） 内外面摩滅 5期
SE1-3	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (6)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	理焼土（下層） 外面一部に黑斑
SE1-4	陶器・瓷	口径 (17.6) 器高 - 底径 -	口縁部	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瓶組土（上層） 雪溶系、砂型式
SE1-5	陶器・瓷	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瓶組土（上層） 外面に押印（梅花文）、自然釉みられる。 雪溶系
SE1-6	瓦質土器・火鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瓶組土（下層） 6～8は同一個体 外面に押印（宝文・巴文）
SE1-7	瓦質土器・火鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	理焼土（下層） 外面に押印（宝文・巴文・梅花文）
SE1-8	瓦質土器・火鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部から底部	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形、底部内面沖縄圧痕、外面板目状圧痕あり	理焼土（下層） 外面に沖縄
SE2-1	カワラケ	口径 (6.6) 器高 1.7 底径 3.4	2/3	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瓶組土（上層） 外面に黑斑あり 7期
SE2-2	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後ヘラ削り	瓶組土 6～7期
SE3-1	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (3.3)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瓶組土
SE3-1	カワラケ	口径 (10.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形	瓶組土
SK4-1	カワラケ	口径 (7) 器高 2 底径 (3.7)	口縁部片から底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 にぶい黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	理焼土
SK4-2	カワラケ	口径 (10.3) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 にぶい黄橙色	ロクロ整形	理焼土
SK4-3	陶器・瓷	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 茶褐色	ナデ整形	瓶組土 内面に黑色物付着 雪溶系
SK5-1	カワラケ	口径 (12.4) 器高 4.4 底径 4.4	1/2	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	瓶組土 内面摩滅し、指ヨウしきものがみられる。外面煤子圧痕あり 6～7期
SK5-2	陶器・瓷	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瓶組土 雪溶系 9期式
SK5-3	陶器・瓷	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	理焼土 外面に押印（梅花文） 雪溶系
SK6-1	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	理焼土 底部外面に黑色物付着
SK6-2	カワラケ	口径 (14) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 にぶい黄橙色	ロクロ整形	瓶組土 内外面カーボン付着
SK6-3	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (7)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瓶組土
SK8-1	カワラケ	口径 (11) 器高 3 底径 (3)	口縁から底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瓶組土
SK8-2	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4.2)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 橙色	ロクロ整形、底部糸切り	理焼土
SK9-1	陶器・おろし皿	口径 (16) 器高 - 底径 -	口底部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	ロクロ整形	理焼土 内面と外面（口縁部）に灰釉 瀬戸・美濃系、織部釉
SK11-1	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (3.5)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄橙色	ロクロ整形、底部板目状圧痕	瓶組土
SK11-2	カワラケ	口径 (12) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 黄白色	ロクロ整形	瓶組土
SK12-1	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 赤褐色	内外面ナデ整形	瓶組土 外面カーボン付着

番号	種別・器種	寸法(cm)	遺存度	胎土・焼成・色調	整形の痕跡	出土位置・備考
SK13-1	陶器・瓶	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 堀藤鉢 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瀬戸土 雲谷系 9期式
SK16-1	カワラケ	口径 36 器高 1.8 底径 (32)		胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 にぶい黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土 6~7期
SK16-2	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 5.4	1/3	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	瀬戸土
SK16-3	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (6)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 灰白色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	瀬戸土
SK16-4	カワラケ	口径 (15.2) 器高 (4.6) 底径 (5.2)	1/4	胎土 砂粒 焼成 良 色調 にぶい黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土 内面に墨書（梅？）6期
SK16-5	陶器・瓶	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 堀藤鉢 焼成 良 色調 暗赤褐色	ナデ整形	瀬戸土 雲谷系 9期式
SK17-1	カワラケ	口径 (10.4) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土
SK17-2	陶器・茶碗	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	ロクロ整形	瀬戸土 内外面に灰釉、目跡あり 瀬戸・美濃系、湖西期
SK18-1	カワラケ	口径 (13) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土
SK19-1	カワラケ	口径 (12.6) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 粗砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土
SK23-1	カワラケ	口径 (10.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土 内面に墨状色物付着
SK23-2	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4.2)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土
SK23-3	陶器・瓶	口径 - 器高 - 底径 -	底部片	胎土 粗砂粒 焼成 やや良 色調 黄赤褐色	ナデ整形	瀬戸土 雲谷系、底部外面に砂粒付着
SK24-1	カワラケ	口径 (10.8) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土
SK25-1	カワラケ	口径 16 器高 3.9 底径 6.3	完形	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土 6期
西館遺-1	カワラケ	口径 (6.7) 器高 1.9 底径 (3.6)	1/2	胎土 砂粒 焼成 良 色調 灰白色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土 6~7期
西館遺-2	カワラケ	口径 9 器高 2.5 底径 4.5	8/10	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後外周を指ネ	瀬戸土 体部外面に墨書、内面にカーボン付着 6~7期
西館瓶-3	カワラケ	口径 (11) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形	瀬戸土
西館瓶-4	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (4.8)	体部から底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	瀬戸土
西館瓶-5	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (5)	体部から底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土 内外面にカーボン付着
西館瓶-6	カワラケ	口径 - 器高 - 底径 (6)	底部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 浅黄橙色	ロクロ整形、底部糸切り後板目状圧痕	瀬戸土
西館遺-7	カワラケ	口径 (11) 器高 2.9 底径 (6)	1/5	胎土 砂粒 焼成 良 色調 内 黒褐色 外 灰白色	ロクロ整形、底部糸切り	瀬戸土、内面にカーボン付着
西館遺-8	内耳土器	口径 (23.9) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 赤褐色	内外面ナデ整形	瀬戸土 外面にカーボン付着、内面くびれ部に沈線あり
西館瓶-9	陶器・花瓶	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰白色	ロクロ整形	瀬戸土 外面に灰釉、瀬戸・美濃系、大窯Ⅰ期
西館瓶-10	陶器・瓶	口径 (11.7) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰白色	ロクロ整形	瀬戸土 内外面に灰釉、瀬戸・美濃系、湖西・大窯Ⅰ期
1号土坑-1	内耳土器	口径 - 器高 - 底径 (22.6)	底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 赤褐色	内外面ナデ整形、底部外周ヘラ削り	瀬戸土 外面にカーボン付着

第4表　遺構内出土金属・石製品観察表

番号	種別	遺存度	長さ(cm) 径	幅(cm) 厚さ	重量(g)	石材・材質	出土位置	備考
SB1-2	釘	3/4	最大値(12)	厚さ0.05	8.1	鉄製	P56B柱穴(下層)	組合者
SB1-3	釘	破片	径(8)	厚さ0.05	2.6	鉄製	P56B柱穴(下層)	曲られていた
SB8-13	釘	下石受け 且部片	幅(40)	厚さ5.4	510	安山岩	礎面付近	
SE1-9	浄瓶蓋	破片	—	厚さ2.5	185	輝緑凝灰岩	埋土(下層)	鎬造蓋に類似、表面に黒曜石
SE1-10	鐵石	1/2	17.3	12 11.5	2870	砂岩	埋土(下層)	3側面中程面に、一部破断
西塗断-11	鐵石	完形	3.9	2.5 1.2	22	泥岩	埋土	研磨面、表面が変化して茶色をしている
西塗断-12	鐵石	1/2	4.4	3.0 1.5	32	泥岩	埋土	研磨面
西塗断-13	飾り金具	3/4完形	(4.1)	幅1.35 厚さ0.03	1.3	金銅製	埋土	ナナ子文様がみられ、両端の透かし穴が「ハート型」

第5表　調査区内出土土器観察表

番号	種別・器種	寸法(cm)	遺存度	胎土・焼成・色調	施文・整形の特徴	出土位置・備考
1	縄文土器・深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒(雲母混入) 焼成 不良 色調 赤褐色	撚糸の凹目文	SD1埋積土 河玉台重～IV
2	縄文土器・深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 内 灰黄褐色 外 にぶい黄褐色	単節縄文	SD1埋積土
3	縄文土器・深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 黒褐色	単節縄文	SK11埋積土
4	縄文土器・深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 内 黄褐色 外 黄灰色	条痕文	P86埋積土 5・6は同一個体 称名寺
5	縄文土器・深鉢	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 黄褐色	条痕文、斜面復ミガキ	SD1埋積土 称名寺
9	土師器・坏	口径 (14) 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 灰黄褐	ナデ整形	SK19埋積土 7世紀後葉
10	土師器・坏	口径 (11.4) 器高 (3.5) 底径 (5.6)	1/2	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 灰白色	ロクロ整形、底部糸切り	SK16埋積土 10世紀
11	須恵器・壺	口径 - 器高 - 底径 (10)	底部片	胎土 砂粒 焼成 不良 色調 灰白色	ロクロ整形、底部ヘラ削り	SD4埋積土 内面に自然釉付着
12	須恵器・甕	口径 - 器高 - 底径 -	体部片	胎土 微砂粒 焼成 良 色調 灰色	外面平行タタキ目、内面ナデ	P12埋積土
13	瓦・女瓦	口径 - 器高 - 底径 -	破片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 灰色	凹面に布目痕、凸面ナデ整形、端部面り	西塗断埋積土、本道由瓦窯跡か
14	カワラケ	口径 (9) 器高 3.5 底径 (4)	1/2	胎土 砂粒 焼成 やや良 色調 淡黄褐色	ロクロ整形、底部糸切り	T-5
15	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 赤褐色	内外面ナデ整形	C-3グリット 外面にカーボン付着
16	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 -	口縁部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 明赤褐色	内外面ナデ整形	C-3グリット 外面にカーボン付着
17	内耳土鍋	口径 - 器高 - 底径 (24)	体部から底部片	胎土 砂粒 焼成 良 色調 赤褐色	内外面ナデ整形、底部外周ヘラ削り	T-3 外面にカーボン付着、底部外面に砂粒付着
18	瓦質土器・火鉢	口径 - 器高 - 底径 -	脚部	胎土 砂粒 焼成 良 色調 黒褐色	内外面ナデ整形	西塗断トレンチ遺構部

第6表　調査区内出土石製品観察表

番号	種別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm) 厚さ	重量g	石材	出土位置	備考
6	石鏃 剥片	完形	2.9	2.3 1.0	6	黒曜石 (高原山産か)	SD1埋積土	一部に調整加工や使用痕がみられる
7	石鏃 剥片	完形	3.6	2.6 1.2	10	黒曜石 (高原山産か)	SD1埋積土上層	一部に調整加工や使用痕がみられる
8	打製石斧	完形	15.3	11.5 4.7	1010	安山岩	SD5底面	縦割状、決れの溝・受け側

A. 調査前区全景（南東から）

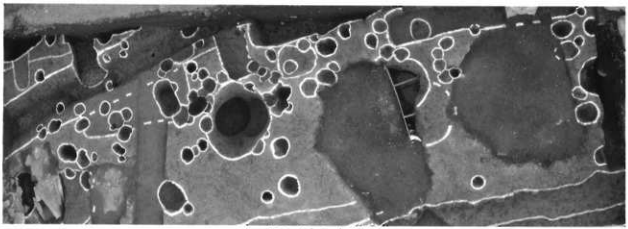
B. 本丸近景（南西から）

C. 本丸と調査区近景（北から）

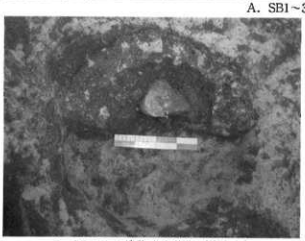
D. 調査区遺構確認状況（南西から）

E. 調査区全景（東から）

図版 2

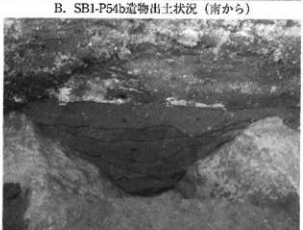


A. SB1～3全景（西から）

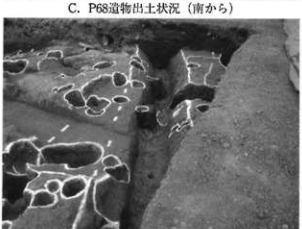


B. SB1-P54b遺物出土状況（南から）

C. P68遺物出土状況（南から）

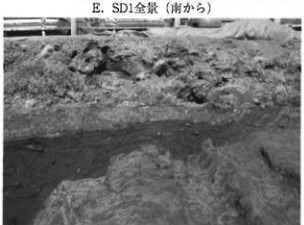


D. SD1土層（南から）

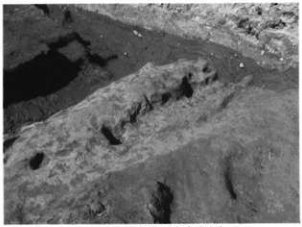


E. SD1全景（南から）

F. SD2全景（南から）



G. SD3～5土層（南から）

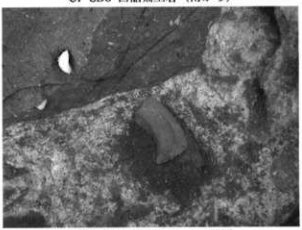


A. SD3･4全景（南東から）

B. SD5･6･西館堀土層（北から）

C. SD5･西館堀土層（南から）

D. SD5･6･西館堀全景（南から）



E. SD5遺物出土状況（南から）

F. SD6遺物出土状況（南から）

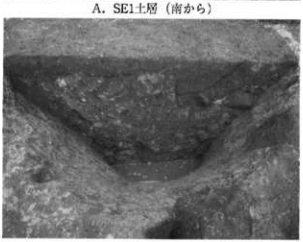
G. 西館堀遺物出土状況（西から）

H. 西館堀骨出土状況（北から）

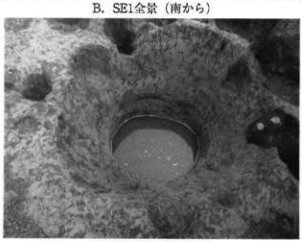
図版 4

A. SE1土層（南から）

B. SE1全景（南から）

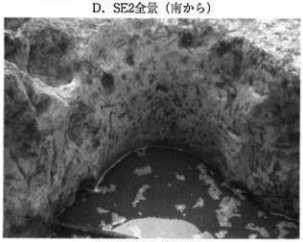


C. SE2土層（南から）

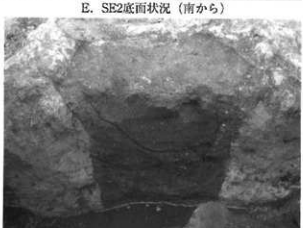


D. SE2全景（南から）

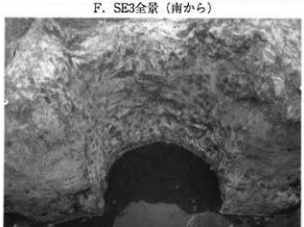
E. SE2底面状況（南から）



F. SE3全景（南から）



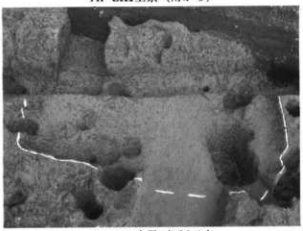
G. SE4土層（南から）



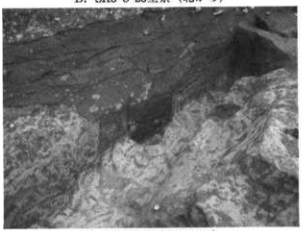
H. SE4全景（南から）

A. SK1全景（南から）

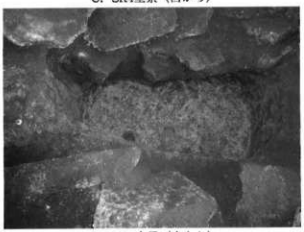
B. SK3･8･23全景（北から）



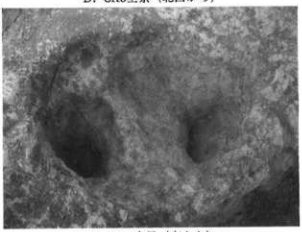
C. SK4全景（西から）



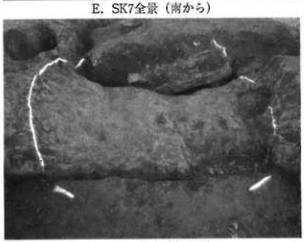
D. SK5全景（北西から）



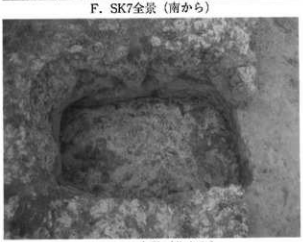
E. SK7全景（南から）



F. SK7全景（南から）

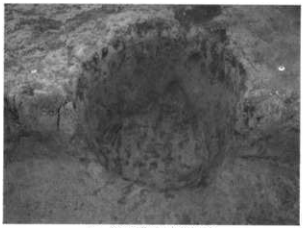


G. SK9全景（南から）

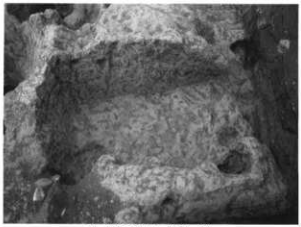


H. SK11全景（北から）

図版 6



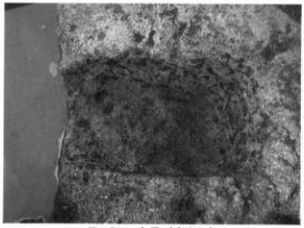
A. SK12全景（北から）



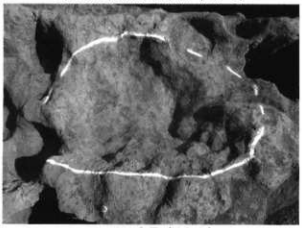
B. SK13全景（南から）

C. SK16全景（西から）

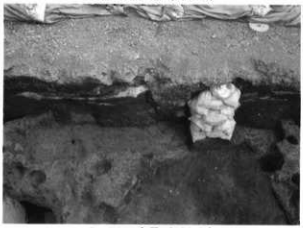
D. SK16炭化物出土状況（西から）



E. SK17全景（南から）



F. SK18全景（西から）

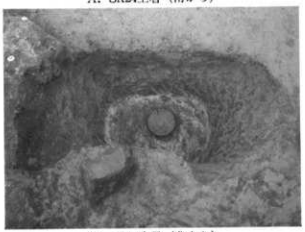


G. SK19全景（西から）

H. SK22全景（西から）

A. SK24土層（南から）

B. SK24全景（南から）



C. SK25全景（北から）

D. 1号土塁・1号整地面土層（南西から）

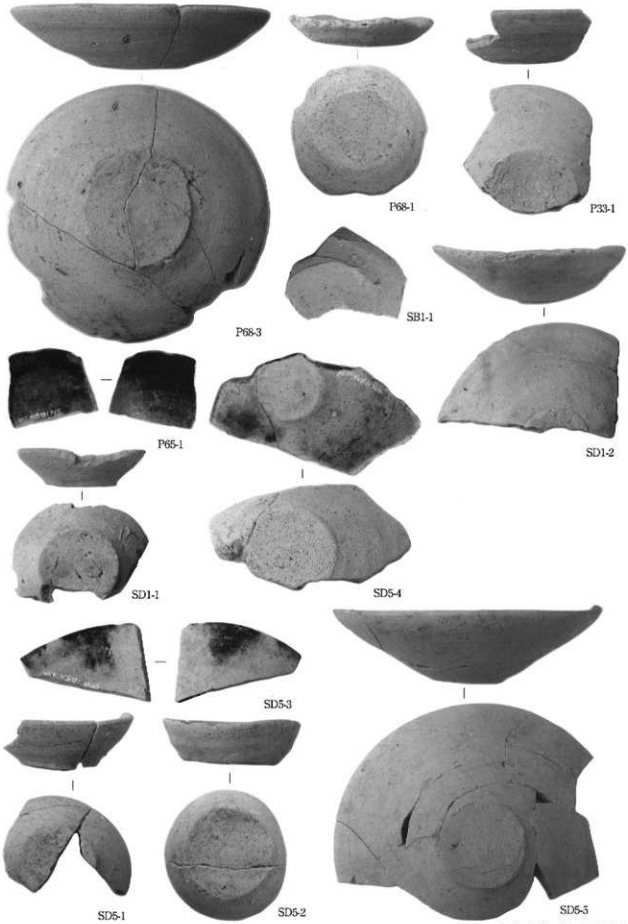
E. 2号整地面（東側）土層（南東から）

F. 2号整地面（西側）土層（南西から）

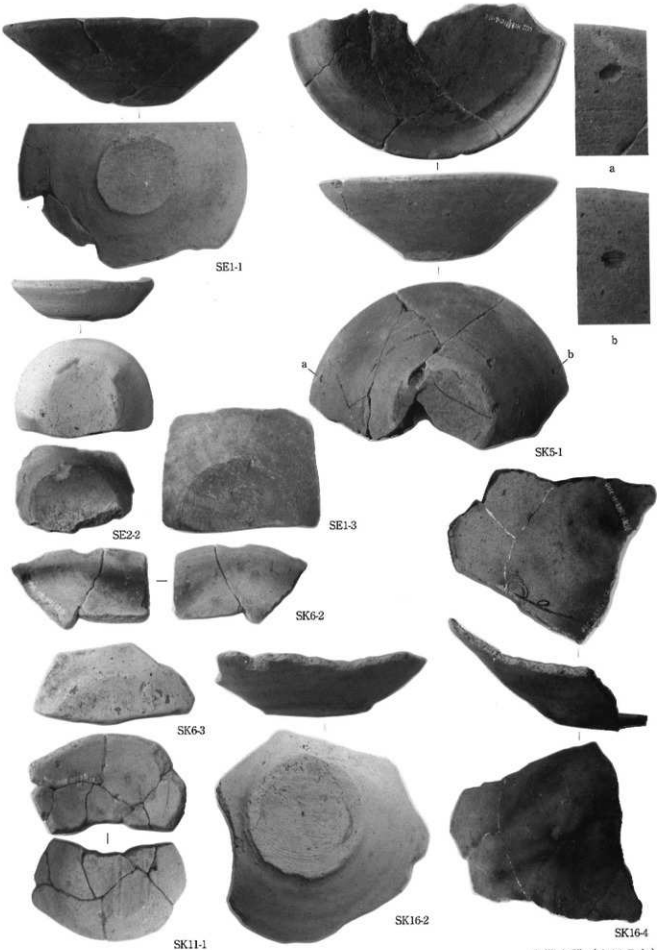
G. 市教委終了立ち会い風景

H. 調査風景

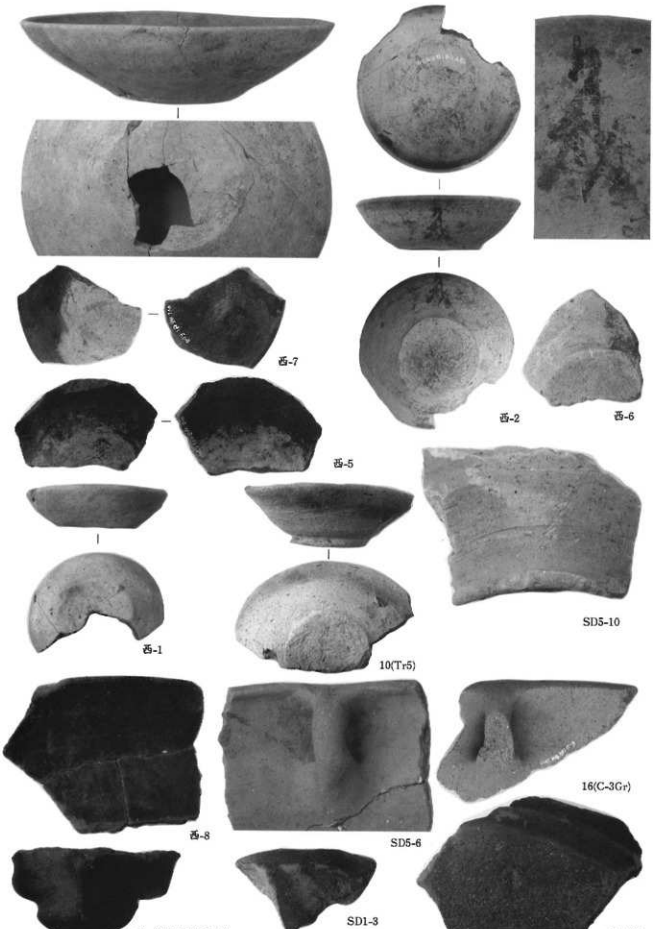
図版 8



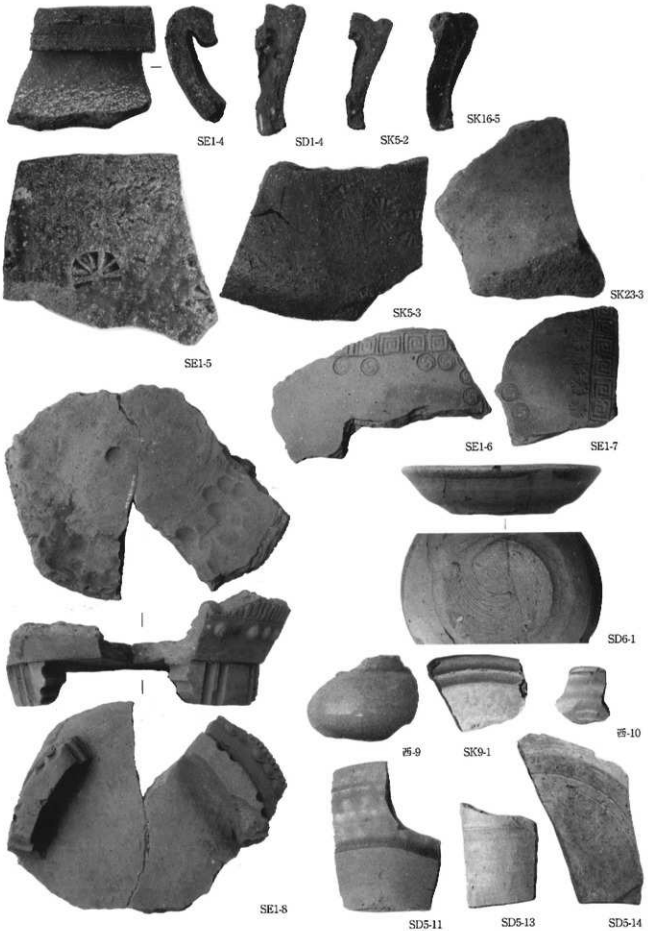
中世土器（カワラケ）



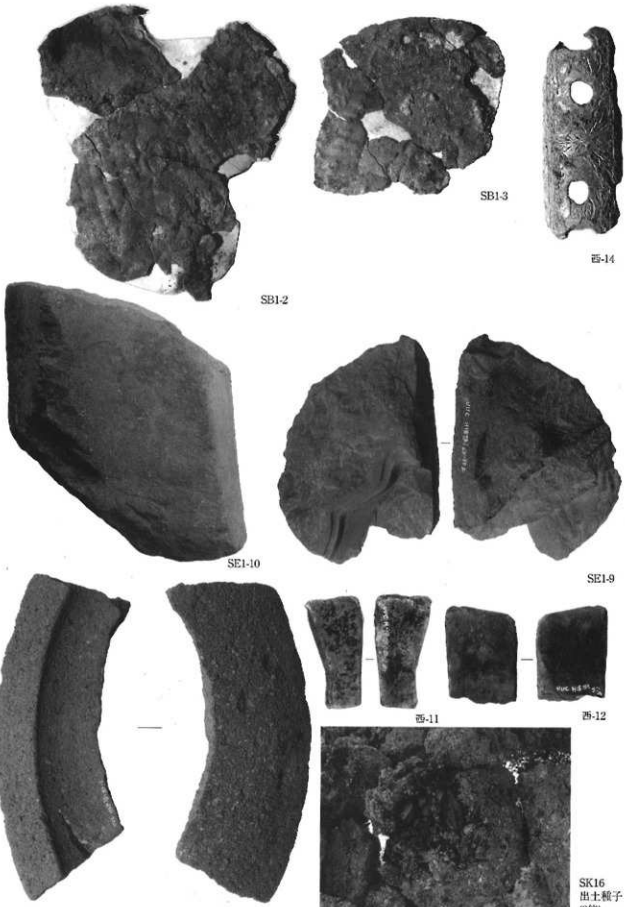
中世土器（カワラケ）



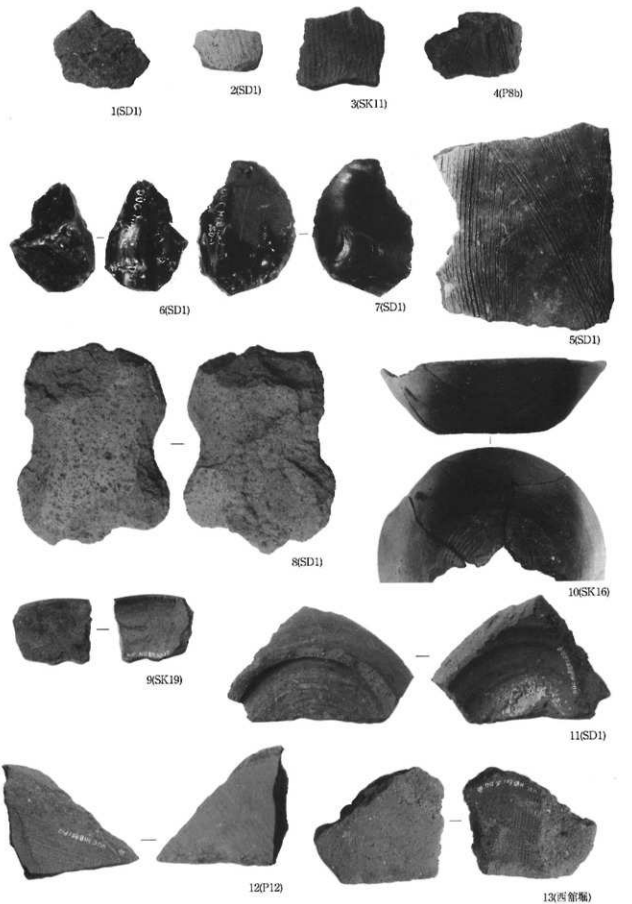
中世土器（カワラケ・内耳土鍋など）


SE1-4
SD1-4
SK5-2
SK16-5
SK23-3
SK5-3
SE1-5
SE1-6
SE1-7
SD6-1
西-9
SK9-1
西-10
SE1-8
SD5-11
SD5-13
SD5-14

中世土器



金属製品・石製品など


1(SD1)
2(SD1)
3(SK11)
4(P8b)
6(SD1)
7(SD1)
5(SD1)
8(SD1)
10(SK16)
9(SK19)
11(SD1)
12(P12)
13(西部堀)

その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	うつのみやじょうあと
書名	宇都宮城跡
副書名	（平成18年度第4次調査）
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第66集
編著者名	水野順敏・新井　潔
編集機関	㈱日本窯業史研究所
所在地	〒324－0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112　℡0287（93）0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒320－8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5　℡028（638）2764
発行年月日	平成20年3月（西暦2008年3月）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
うつのみやじょうあと 宇都宮城跡	とちぎけんうつのみやしきたまち 栃木県宇都宮旭1丁目3440番地16他	09201	350	36° 33′ 13″	139° 52′ 58″	20070209～ 20070313	約250㎡	マンション建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇都宮城跡	城跡	中世・近世	掘立柱建物跡　3棟 小穴　116口 溝跡　6条 井戸跡　4基 土坑　21口 西館堀　1条 土塁　1箇所 整地面　2箇所	カワラケ・内耳土鍋・陶器・金属製品・石製品・炭化物・骨・縄文土器・石器・土師器・須恵器	SB1より懸仏が出土

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第66集

宇都宮城跡
（平成18年度第4次調査）

発行日　平成20年3月
発　行　宇都宮市教育委員会
宇都宮市旭1-1-5
TEL（028）632-2764
印　刷　株式会社　松井ビ・テ・オ・印刷